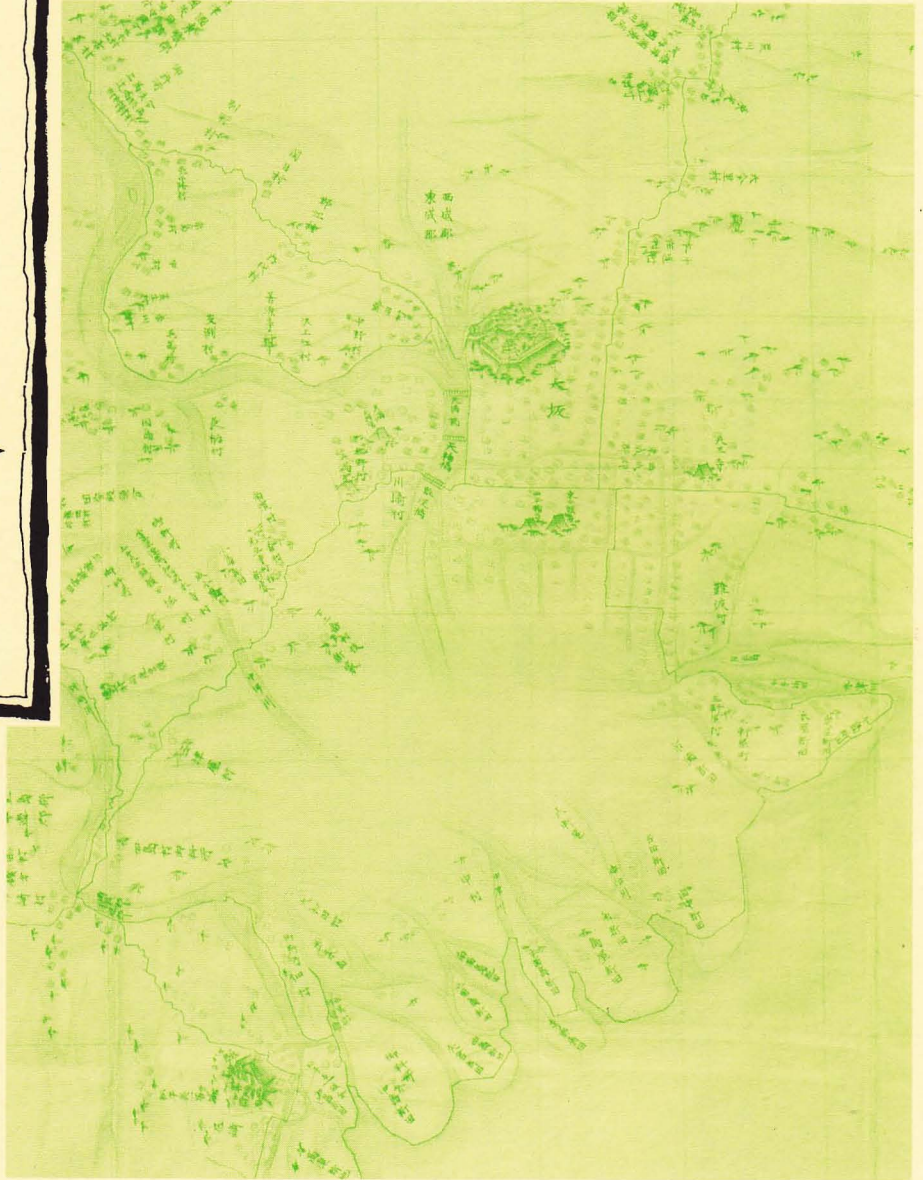


史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇一〇年 第六〇号



伊能忠敬研究会

高い石垣と天守閣、立ち並ぶ櫓が威容を誇る大阪城が際立つ大阪付近である。視点が西にあるため、北を上にとすると大阪城は横倒しの形になる。

第五次測量の文化二年（一八〇五）、紀伊半島を一周、八月一日に大阪に入る。宿舎があつた齊藤町は現在の西区江戸堀で、中之島中央部南側の対岸から、少し南に入った所である。大阪といえは間重富である。当時重富は若い景保の補佐役として江戸にあつたが、大阪を守る息子の清市郎（重新）は到着の一報を受け、ただちに麻田剛立門下の曆学者、足立左内を伴つて挨拶に来た。齊藤町と間家の長堀富田屋町は二kmほどの距離である。大阪にはこの日から十二泊。間氏にはご馳走にもなり、観測所に天測に向くなど、往来を重ねている。受け入れ準備の都合で測量休みとした日は麻田剛立の碑にも詣でた。主に湾岸の新田外縁を測っているが、市街地との間がほかされ、現在の海岸線とも大きく隔たる測線沿いの新田の位置確認には骨が折れる。日記にある恩貴島新田は地図にはないが、現町名は此花区春日出中、同北、島屋、西島となっており、地図上の島屋新田、各西島新田などに重なるようだ。その東（内陸側）が春日出新田で、日記では屋敷場所の春日出新田会所を称賛している。当時この新田を経営していた和泉佐野の豪商食（食野）氏が紀州徳川家の巖出御殿を拝領、移築し、八州軒と呼ばれた建物で、庭園には淡路、紀伊、大和など八国の風光を収めるとされた。のち、大正年間に横浜三溪園に移築され、臨春閣として現存する。跡地には碑がある。

挨拶、打ち合わせに訪れた役人たちのうち、奉行所地図師大岡藤二などについてもふれたいところだが、紙面がつきた。

鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次

60号

巻頭

史跡探訪10「伊能測量隊・江ノ島の宿」

大沼 晃 一

話題Ⅰ

『伊能家の仏壇』

伊能忠敬関係資料の国宝指定

編集部 二

伊能忠敬研究会二〇一〇年度総会報告

鈴木 純子 四

伊能忠敬の歌『確かな一歩』を制定

事務局 六

完全復元伊能図巡回フロア展、進行中

事務局 八

話題Ⅱ

伊能大図総覧の地名と景觀（十四）

星埜 由尚 一一

「夷屋」を捜し求めての旅

大沼 晃 二一

研究ノート

伊能忠敬研究（十）忠敬の見た風景

石谷 春香 二五

ロシヤでの武揚

伊藤 栄子 三八

名著『伊能忠敬』（四）

前田 幸子 四三

伊能塾講座

伊能図とともに深化する私の雑学

大沼 晃 四九

地図屋の伊能測量学

猪原 紘太 五三

九州支部便り

三つの講演と「伊能中図」、そして感謝

石川 清一 五七

忠敬談話室

清水弟・伊能洋・伊能三代・秋間美

編集部 五八

お便りから 日々の話題 お知らせ

編集部 六三

表紙図解説 鈴木純子

史跡探訪10

伊能測量隊・江ノ島の宿「夷屋吉右衛門」

◇所在地 神奈川県藤沢市江の島一丁目 ◇概要 現存する「恵比寿屋」は江戸時代から続く老舗旅館。伊能測量隊の宿「夷屋」との関係が期待されるが、同旅館には伊能隊が宿泊したという記録は一切残っていないという。なお江ノ島には当時「恵比寿屋」がもう一軒あった。



「創業江戸時代初期。島に弁天、旅館は恵比寿。三百五十年変わらぬおもてなしで、伊藤博文・三条実美・桂小五郎・尾上菊五郎・歌人吉井勇他、多くの旅人達から愛されてきた宿」(同旅館HPより) 今も老舗らしい風格ある佇まいをみせる「恵比寿屋」の門前に立つ大沼会員。

忠敬先生宿泊の宿「夷屋」えびすや はいずこに

案内人

神奈川県藤沢市在住

大沼 晃

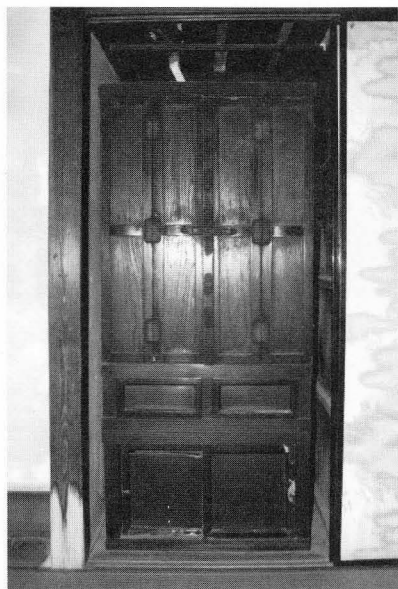
藤沢市は市制七〇周年を迎え、この度「わがまちふじさわ景観ベストテン」を選出した。相模湾の各地から眺められる江ノ島のシルエツトは「湘南のシンボル」として地域の人々に親しまれておりダントツでトップ入りした。

その江ノ島に享和元年(一八〇二)伊能測量隊は宿泊している。『測量日記』の四月二十一日の条に「夷屋吉右衛門」へ止宿したとある。現在も江ノ島入口の大鳥居から山頂に伸びる参道の左側に「恵比寿屋」が、「創業三五〇年 御料理旅館」として存在している。はたして忠敬一行が止宿した旅館であろうか。子細は二一頁の『夷屋』を捜し求め「の旅」を読んでいただきたい。

小生と伊能忠敬研究会との出会いは、一九九五年まだ伊能日本図探研究会発足したての時からである。第四の職業人生を摸索していた時、日経新聞文化欄に掲載になった渡辺一郎代表の記事を拝見し、忠敬先生を手本にしながら新しい道を拓きたいと考え入会した。錚錚たる博学多彩な会員の中で、知識不足のために圧倒されっぱなしの小生が今日まで何とか継続できているのは、気さくで飾らない先輩諸氏のお引き立ての賜物と感謝している。忠敬先生の足跡を訪ねての旅行会も思いで深いもので、我が人生の糧になっている。機会があれば恩返しのために横浜・金沢・江ノ島めぐりの旅の案内人になりたい。

(おおぬま あきら・マネー&キャリアマネージメントアドバイザー)
【二一頁『夷屋』を捜し求めての旅』も併せてお読みください。】

忠敬が購入か 伊能家の仏壇



上：扉を閉めたところ

右：扉を開けたところ

正面奥、白っぽく光って見えるのは金箔が貼られた部分。

【画像資料】伊能忠敬記念館提供

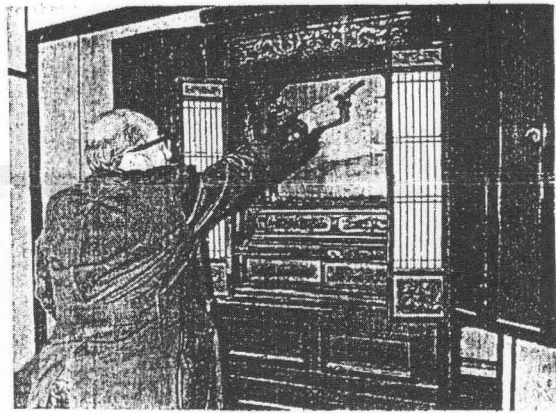


インターネット百科事典『ウィキペディア』の「伊能忠敬」の項に「現存するものもとても古い唐木仏壇の一つに、伊能忠敬家の仏壇（一八世紀頃）がある」という記述を見つけ、この仏壇は今でもありませんか、と伊能陽子さんに問い合わせたのは昨年のこと。早速「仏壇の話、遠い記憶をたどって昔のフアイルの中から発見しました。更めて今読んだら面白いです。もしかしたら忠敬さんが注文したかも：ですね。」という添書きと共に左頁の新聞記事が送られてきた。仏壇は写真の通りの立派なもの。忠敬先生が隠居して江戸深川に住んでいた頃に作られ、佐原に送られたものではないかと推定されている。現在もこの仏壇は旧宅に保存されているが、かなり大きいので記念館での展示は不可能とのこと。この仏壇は忠敬先生がそのような伊能家に相応しいと考えて購入したものではないだろうか。

ルーツは江戸仏壇?

東京仏壇

佐 伊能家の仏壇に共通点
原 吉崎さんが調査、確認



伊能忠敬旧宅に残る仏壇を調べる吉崎さん

伊能忠敬旧宅（国指定史跡）に残る仏壇は、江戸で作られ佐原に運ばれたものではなからうか。江戸時代から伝わるという江戸東京仏壇のルーツを探っている東京宗教用具商業組合専務理事の吉崎弘氏が、このほど、伊能家旧宅を訪れ忠敬の時代から伝わる仏壇を調査した。

ひとくちに仏壇といっても、地方ごとに材質や金具、彫刻などに大きな違いがある。金沢、名古屋、京都などに伝わる塗（ぬり）仏壇は桐、杉、榎、などの材質に漆を塗り、金具を金たんに使った豪華な飾りを施しているのが大きな特徴だが、これに対し

きな火事や地震などの災害に、は中断されたままになって幾度も通っていて、その都度多くの仏壇が失われ、特に関東大震災と東京大空襲による被害は大きく、江戸仏壇が東京仏壇のルーツにあたるという物語が手元に残ったと思われていた。

ところが、数年前に東京浅草にある人形店「吉徳」に伝わる仏壇を調べてほしいという要請が吉崎さんのもとに寄せられ、これを調べたところ、同店の創始者、初代・山田徳兵衛のもので、安永四年（一七七五年）に作られたことがわかった。

この仏壇は前述した東京仏壇の特徴を持ち、江戸仏壇が東京仏壇のルーツに当たることを証明する有力な手掛かりになると思われたが、これ一つだけでは決定的な証拠にはならないため、ほかにも同じような仏壇を探していたところ、佐原市の伊能忠敬旧宅庭園に残っている仏壇が、山田家のもので非特長に似ていたという筋が伝わってきた。

吉崎さんはすぐに忠敬旧宅を訪れこれを確認したが、直後に病に倒れてしまい調査

伊能家に伝わる仏壇は、忠敬が隠居して江戸深川に住んでいたころに作られたものと思われ、さらに江戸と佐原は水路で結ばれていたとあり、伊能家が町家上りの名主で、山田家も代々の商家という経緯や身分の上でも近いところから、二つの仏壇が同系統の工房で作られた可能性も強く、吉崎さんは「伊能家の仏壇は江戸仏壇が東京仏壇の原型にあたることを証明する重要な手掛かりになる」と話している。

千葉日報 県東版 平成4年11月17日（要旨）

「伊能忠敬旧宅に残る仏壇は、江戸で作られ佐原に運ばれたものではなからうか。」東京宗教用具商業組合専務理事・吉崎弘氏が佐原の伊能家旧宅に伝わる仏壇を調査した。その結果、この仏壇は人形店「吉徳」の山田家に伝わる仏壇（1775年・安永4製造）より20年ほど後の、忠敬が隠居して江戸深川に住んでいた頃に作られたものと推定した。両家の仏壇は江戸仏壇が現在の東京仏壇（唐木材で装飾が少ない）の原型であることを証明する重要な手掛かりになるという。

伊能忠敬関係資料の国宝指定

鈴木純子

「忠敬の測量器など国宝へ」「伊能忠敬資料国宝に 文化審議会答申」など、平成二二年度の国宝・重要文化財新指定に向けた、三月一九日の文化審議会答申（文部科学大臣あて）を報ずる三月二〇日各紙朝刊の記事見出しは、まだ記憶に新しいことであろう。報道に接しての慶びの声は事務局にも相次いで寄せられた。

この答申にもとづいて文部科学大臣が指定を行い、六月二九日付の官報号外に文部科学大臣告示第九五号として公示された。官報公示が指定の成立を意味する。今回の「伊能忠敬関係資料」（二、三四五点、香取市所有、伊能忠敬記念館保管）は、すでに国の重要文化財指定を受けており、昇格指定ということになる。

国宝の指定は一九五〇年施行の「文化財保護法」による。日本に存在する建造物・美術品などの有形文化財のうち文化史的・学術的価値の高いものとして、文部科学大臣が指定する重要文化財のうち、特にその価値が高いものが国宝に指定される。法律上の範疇としては国宝も重要文化財に含まれる。文化財保護法制定前の旧制度では現在の重要文化財にあたるものが全て国宝とよばれていた。

国宝・重要文化財は建造物と美術工芸品の二部門、後者はさらに絵画、彫刻、工芸品、書跡・典籍、古文書、歴史資料、考古資料の七部門に細分され、「伊能忠敬関連資料」は「歴史資料」に属する。歴史資料は国宝指定の歴史が浅く、これまで二件のみであったが、今回の指定により「伊能忠敬関係資料」が、「慶長遣欧使節関係資料」（仙台市博物館）、「琉球国王尚家関係資料」（那覇市歴史博物館）と肩を並べ、

都合三件になった。錚々たる顔ぶれと言えよう。指定のリストに記された資料の概要は左記のとおりである。

本資料は『大日本沿海輿地全図』を作成した伊能忠敬（一七四五～一八一八）の事蹟に関する一括資料で、地図・絵画類、文書・記録類、書状類、典籍類、器具類からなる質量ともにまとまって伝存する史料群である。

江戸時代に全国を高い精度で測量し、正確な地図を作成することによって国土の形状を明らかにした伊能忠敬の学問の内容および測量実施や地図制作の具体的な方法を知ることができる比類ない資料群であり、我が国の測量史・地図史上における極めて高い学術的価値を有するとともに、伊能忠敬の生涯の事蹟とその人物像を多面的に伝えて歴史上に極めて価値が高い。

二、三四五点の資料の内訳は、地図・絵図類：七八七点、文書・記録類：五六九点、書状類：三九八点、典籍類：五二八点、器具類：六三点である。

新指定国宝・重要文化財の一部は四月二七日から五月九日まで、東京国立博物館で展示された。他の新指定文化財と並んで展示された地図、測量日記、器具などの関係資料は参観者の注目をひときわ集めていたように思う。

指定により、この資料群の社会的な注目度・評価が高まることは内容の充実ぶりからみて必然のことといえる。それだけの業績を残し、関連する諸記録をもないがしろにできなかった忠敬、忠誨など当代の人びと、それらの資料を大切に守ってこられた伊能家の方々、寄贈され

官報

上		欄		下		欄	
名 称 及 び 員 数	指定告示	名 称 及 び 員 数	所 有 者	所 有 者 の 住 所			
伊能忠敬関係資料 一、地図・絵図類 一、文書・記録類 一、書状類 一、典籍類 一、器具類	平成二十一年 文部科学省告示 第四百四号	伊能忠敬関係資料 一、地図・絵図類 一、文書・記録類 一、書状類 一、典籍類 一、器具類	香取市 (伊能忠敬記念館保管)	千葉県香取市佐原〇二二七			
七百八十七点 五百六十九点 三百九十八点 五百二十八点 六十三点		七百八十七点 五百六十九点 三百九十八点 五百二十八点 六十三点					

(歴史資料の部)

○文部科学省告示第九十五号
文化財保護法(昭和二十五年法律第二百四号)第二十七条第三項の規定により、次の表の上欄に掲げる重要文化財を同表下欄のように国宝に指定する。
平成二十二年六月二十九日

文部科学大臣 川端 達夫

【官報(号外一三六号) 平成二十二年六月二十九日付】

なお、香取市の伊能忠敬記念館では平成二十二年特別展『伊能忠敬関係資料〜国宝への歩み〜』を、下記のとおり四期に分けて開催している。「測る、勉学する、記録する、作図する」をキーワードとして、忠誨関係資料も含めて主要資料が順次公開されている。

(すずき じゅんこ・事務局長)

た資料の保存・公開に努めてこられた香取市の方々の尽力が相俟つてのことである。あらためて敬意とお祝いを申しあげる。
伊能グループの事蹟、伊能図についてそれぞれの視点から調査・研究し、発信を重ねてきたわが研究会の活動もいくばくかの力になっていくかも?! と付け加えることもあながち的外れではないと信じている。折角の貴重な資料群、各地に残る関係資料を活用しての研究、未発見資料の探索などを通じて、研究会の活動もさらに深めて行きたいと思う。



伊能忠敬記念館特別展ポスター

【伊能忠敬記念館特別展日程】

- 第一回 七月六日(火)〜九月二日(日)
第二回 九月一四日(火)〜十一月四日(日)
第三回 十一月一六日(火)〜平成二十三年一月二三日(日)
第四回 平成二十三年一月二五日(火)〜四月三日(日)

伊能忠敬研究会二〇一〇年度総会報告

事務局

七月一六日(金)午後、東京深川の富岡八幡宮において、二〇一〇年度総会が開催されました。今年は伊能測量開始二一〇年にあたり、また、伊能忠敬記念館所蔵の伊能忠敬関係資料の国宝指定という嬉しいできごともありました。そこで、総会に先立つ第一部を記念の会とし、当会理事で作詞家としても活躍の柏木隆雄氏作詞、朝岡真木子氏(東京芸大作曲科卒、日本歌曲振興会等理事)作曲、当会制定の伊能忠敬の歌『確かな一歩』の発表演奏を行いました。東京芸大音楽科出身で、歌曲、オペラで活躍中の鴨川太郎氏の独唱、ピアノ伴奏は作曲者の朝岡真木子氏による本格的な演奏に続き、歌唱指導もあつて、参加者一同汗を拭きつつ声を合わせました。(次頁参照)

第二部総会は、総合同会石川九州支部長により開会、鈴木事務局長から会規約に基づく今総会成立の確認がありました。(三月末現在の会員数一八二名、出席者三六名、委任状提出者一〇三名)

まず、星埜代表理事から次のような報告と挨拶がありました。

(一) 今年が伊能測量開始二一〇年の節目にあたります。また、伊能忠敬関係資料が国宝になり大変名誉のことです。それらの資料の保存や解説等に貢献された六名の方々が昨年末から今年の五月にかけてお亡くなりしました。(熊谷要平、菅哲彦、安藤由紀子、伊能陽子、佐久間達夫、進藤綾子)敬称略)ここよりお悔やみを申し上げます。(全員による黙祷)

(二) 去年の四月、深川スポーツセンターを皮切りに「完全復元伊能図全国巡回フロア展」を展開中です。今年も小金井市、水戸市、松江

市がすでに済んでおりますが、八月から福岡市、伊予市、新潟市、加古川市、十月に奈良市、金沢市で開催されます。来春、香取市、郡山市が決定しており、その他各地で検討中です。会期中、会場説明員としておおよそ延べ一〇〇名の会員にお手伝いいただきましたこと感謝いたします。引き続きご支援ください。なお、フロア展の関係で三名の幹事を追加任命したことおよび伊能測量ゆかりの地を巡る旅行会が中断していることをお知らせいたします。

(三) 会員との結びつきを深めるための会報づくりに前田編集長・理事が活躍され、充実した内容のものが予定通り発行できました。関係者の尽力に感謝いたします。

次に、香取禧良氏(香取支部長・理事)が議長に選任され、「二〇一〇年度事業報告」「同年度収支報告」「二〇一〇年度事業計画案」「同年度予算案」(第一、四議案)が満場一致で承認されました。

※第一号議案から第四号議案までは鈴木事務局長・理事が説明を担当、第二号議案終了後、清水監事より問題がないとの監査報告がありました。

※その他 ①役員追加について(敬称略)、東北支部長として松宮輝明、フロア展担当幹事として木谷道宣、堀野正勝の三名を承認。

②ホームページ「InoPedia」について、渡辺名誉代表から発足の趣旨説明があり、伊能忠敬研究会とは別個に開設、維持管理に費用がかかるので資料類の販売なども検討したいとの報告がありました。

総会終了後、懇親会を行いました。第一部の演奏家による美声の披露もあり、遠来の会員も交えて、和やかなひとときを過ごしました。

(記事のとりまとめには大沼晃会員のご協力をいただきました)



2010 年度総会記念写真

(後列) 山本・狼・鈴木・高安・矢能・大沼・今村・白根・窪谷・宮内・新沢・馬場
 (中列) 石川・大庭・坂本・堀野・鶴飼・松宮・島崎・岡部・伊能・秋間・伊藤・河島・猪原
 (前列) 伊能・平岡・朝岡・柏木・星埜・渡辺・鴨川・鈴木・清水・香取 【写真撮影】戸村
 (敬称略)



背景がピカピカで鏡のようですね

【写真撮影】木谷道宣会員

❖ きれいになりました!! ❖

伊能測量開始二百年を記念して建立された富岡八幡宮境内の伊能忠敬像。東京の空気と風雨にさらされて少し煤けてきていましたが、日本ウオーキング協会のご尽力により、制作者の酒井道久さんの監修のもと、七月二六・二七日に専門業者による清掃が行われ、写真のようにきれいになりました。七月二八日のお祓いに、伊能洋さん、酒井さん、会員でウオーキング協会の木谷道宣さんと大内惣之丞さん、同じくウオーキング協会の伊藤浩史さん、渡辺一郎さんが出席されました。

総会前に清掃を済ませ、祝賀行事のひとつにとの案でしたが、梅雨時のため時期が少々ずれました。費用は陽子さんのご供養にと洋さんが拠出されました。機をみてぜひご覧下さい。(鈴木)

伊能測量開始二一〇年・伊能忠敬関係資料国宝選定記念

伊能忠敬の歌『確かな一歩』を制定

事務局

確かな一歩

柏木隆雄

東から西へ連なる緑の島々
美しい日本の姿形
歩いて 歩いて 描いた人は
伊能忠敬

九十九里の砂浜で
潮騒を聞きながら
海の向こう 宇宙の彼方
地球の不思議を 学ぶこと

確かなものを 求めて
与えられた命のかぎり
精励の日を つなぐ
測量人生

礼節常に 人に感謝
謙譲の心で 生きた
伊能忠敬

踏み出した 確かな一歩が
世界に示した 姿形
美しい日本の 姿形



総会報告にあるとおり、二〇一〇年度総会にあわせて、発表会を行いました。発表会の模様は七月一七日の朝日新聞東京版に写真入りで報道されました。

スペースの関係で楽譜は冒頭のみ紹介します。

伊能忠敬の生涯の一步步々を思いながら、綴られたという柏木さんの詩に、作曲者の朝岡真木子さんも、力強く大地を踏みしめる感じを表現されたとのこと。

鴨川太郎さんの朗々たる歌唱(二回)に続いて、一節ずつ後を追ひ、さらに通して二回歌いましたが、お手本のようにリズムカルに、一步步々踏みしめる感じを出すには、もう一息というところでした?!



作曲者・朝岡真木子さん



作詞者・柏木隆雄さん(中央)



声楽家・鴨川太郎さん

完全復元伊能図フロア展、着々と進行中

渡辺 一郎

昨年四月に伊能測量出発地に近い深川スポーツセンターで第二回の完全復元伊能図フロア展を開催しましたが、その後、着々と各地において展開中です。これまでに開催した会場は次の通りです。

- ◇江東区立深川スポーツセンター(二〇〇九・四) 六、〇〇〇人
- ◇横浜港大棧橋ホール(二〇〇九・六) 二、〇〇〇人
- ◇さいたま市与野体育館(二〇〇九・一一) 三、一〇〇人
- ◇小金井市体育館(二〇一〇・五) 八、五〇〇人
- ◇水戸市青柳市民体育館(二〇一〇・六) 三、〇〇〇人
- ◇松江市総合体育館(二〇一〇・六) 三、六五〇人
- ◇福岡市中村学園大学体育館(二〇一〇・七) 三、〇一〇人
- ◇愛媛・伊予市しおさい公園市民体育館(二〇一〇・八) 八、〇〇〇人
- ◇新潟・新潟市東総合スポーツセンター(二〇一〇・八) 二、一〇〇人
- ◇兵庫・加古川市兵庫大学体育館(二〇一〇・八) 四、三〇〇人
- ◇奈良大学体育館(二〇一〇・一〇) 二、四〇〇人
- ◇金沢工業大学体育館(二〇一〇・一〇) 三、一三〇人

今後、二〇一一年の予定(確定分のみ)は以下のとおりです。

- ◇三月二五日(金)～二七日(日) 千葉・香取市「佐原体育館」
- ◇四月二八日(木)～五月一日(日) 福島・郡山市「ビッグパレット」
- ◇六月一六日(木)～一九日(日) 北海道・帯広市「十勝オーバル」
(帯広の森運動公園内)

多数の御参加をお待ちします。有志をお誘いください。

これまでに開催された十二会場のうち、一〇会場に参加しました。そのうち、八会場は主催側要員としての参加であり、二会場は開催希望者の案内のための参加でした。催行中に気がついたことをメモ的に記して御参考に供します。

まず、いずれの会場も熱心な推進者(母体)がいて、その方々の不退転の努力により実現したものです。推進にあたっている中央委員会の一員として心から御礼を申し上げます。

参観者からは「伊能忠敬はよく知っているけれど、こんなに凄い仕事をしていたとは知らなかった。びっくりした。俺もがんばらにや」とか、「私も何か考えよう」という声がしきりでした。

また、伊能大図上で地図情報を現代と比べながら、地理巧者らしい人が話をし、周囲の方がうなずきながら聞く即席の地図教室が何処でも、いつでも、自然発生していました。

参加人数には関係なく、人々に大きな感銘を与えたことは共通しており、いずれの会場も成功であったことは間違いないと思います。

それでも、お客さんを主催者が期待していた以上に集めて、大成功した会場もあります。

松江会場は大丈夫かな、と心配していたのですが、旧知の山陰中央新聞の東京支社長にお願いして動いてもらい、松江市の開府四〇〇年記念事業に組み込んで予算二〇〇万円をつけていただきました。さらに市に事務局もお願いしました。

動きにつれて、NHKをはじめ、山陰中央さん、中央各紙など全報道機関の協力を得て数字のような成果となりました。蛇足ですが、売店の売上げ促進に、フランス中図の松江周辺だけの現寸大伊能中図(ポスター大、一枚千円)を作ってみました。地元の人々が熱心にPRし

てくれて、五五〇枚も売れ、収益に貢献できました。結果的に、全体の黒字分の半分を地元委に還元することができました。助成金が二〇〇万円位あると、集客の努力次第で、何とかいけるようです。

伊予市は人口五万弱の小さな町ですが、N T T友人の紹介で、スタンド経営者の門田さんに会ったのが始まりです。出かけて説明しましたが、伊能に理解のあるイベント馴れた方で、すぐ中村市長に紹介していただきました。市長は体育館の総合的な活用を考えておられていて、伊能イベントを題材に、イベント会場としての利用を試みる積りの方でした。

助成金もお願いし、市の職員も多数応援していただきました。民間



金沢展で説明する河崎会員

の歴史研究会として著名な伊予史談会の武智前会長が実行委員長になり、学校関係を軒並み個別訪問。各チャンネルを通して前売券を三千枚弱販売する。プレイベントとして、農業高校生が伊能測量をや

全国放送しました。

それだけの準備をしておいて開演したところ、松山を始め宇和島辺までの多数のお客さんが集まりました。駐車場は四百台分用意し、市の職員数人が、ガードマン数人を指揮して整理しました。

駐車場が完璧だったのも成功の大きな原因だったと思います。伊能展の成功は大変うれしいが、見方を変えようと、伊能を題材にして、イベント催行の大演習を行って、見事に成功された点を高く評価したい。いいイベントを持つてくれば、しおさい体育館は使える、という自信を得られたでしょう。これは本当に貴重なことだと思います。

そのほか、伊能研・新潟支部では、土地家屋調査士会さんの協力を得て、一手に新潟会場を仕切っていただきましたし、福岡では説明員を九州支部の会員だけで引き受けてもらいました。金沢展では北陸支部長の河崎さんが副実行委員長として準備から解説までべつたり張りついて頑張ってくださいました。

東京近郊の展示では多数の皆さまに説明員として出ていただき、ありがとうございます。加古川展には関西支部の多数の会員にお出でいただきました。水戸会場では会員の川上さんご夫妻はウオーキング協会幹部として主催者となつて頑張ってくださいました。

計画では、あと四二会場、催行しなければならぬことになっています。会員の皆様のご縁で、ぜひ、いくつか、主催者になっていただけそうところに声をかけていただければ幸いです。よろしく願います。

(わたなべ いちろう・名誉代表)

伊能大図総覧の地名と景観(十四)

星 埜 由 尚

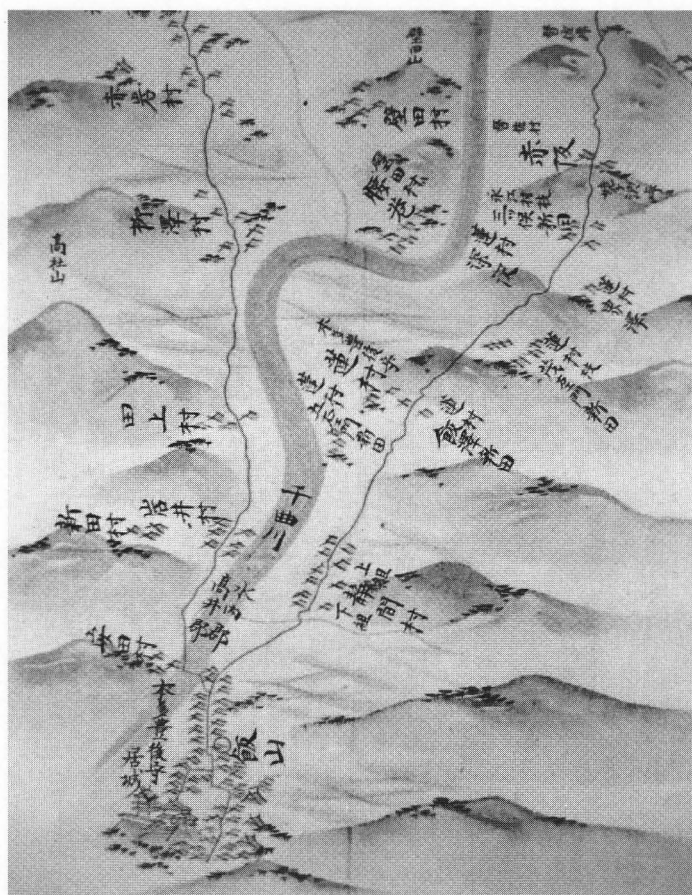
信州は、高い山脈が連なり、その間に盆地が発達している。善光寺平、佐久平、松本平、諏訪平、伊那平と千曲川、犀川、天竜川に沿った細長い盆地である。木曾川には、盆地はみられないが、木曾谷と呼ばれる深い谷に沿って中山道の宿が連なっている。このような盆地と谷を伊能忠敬は限無く測量した。そのあとを辿ってみよう。

飯山・須坂・松代

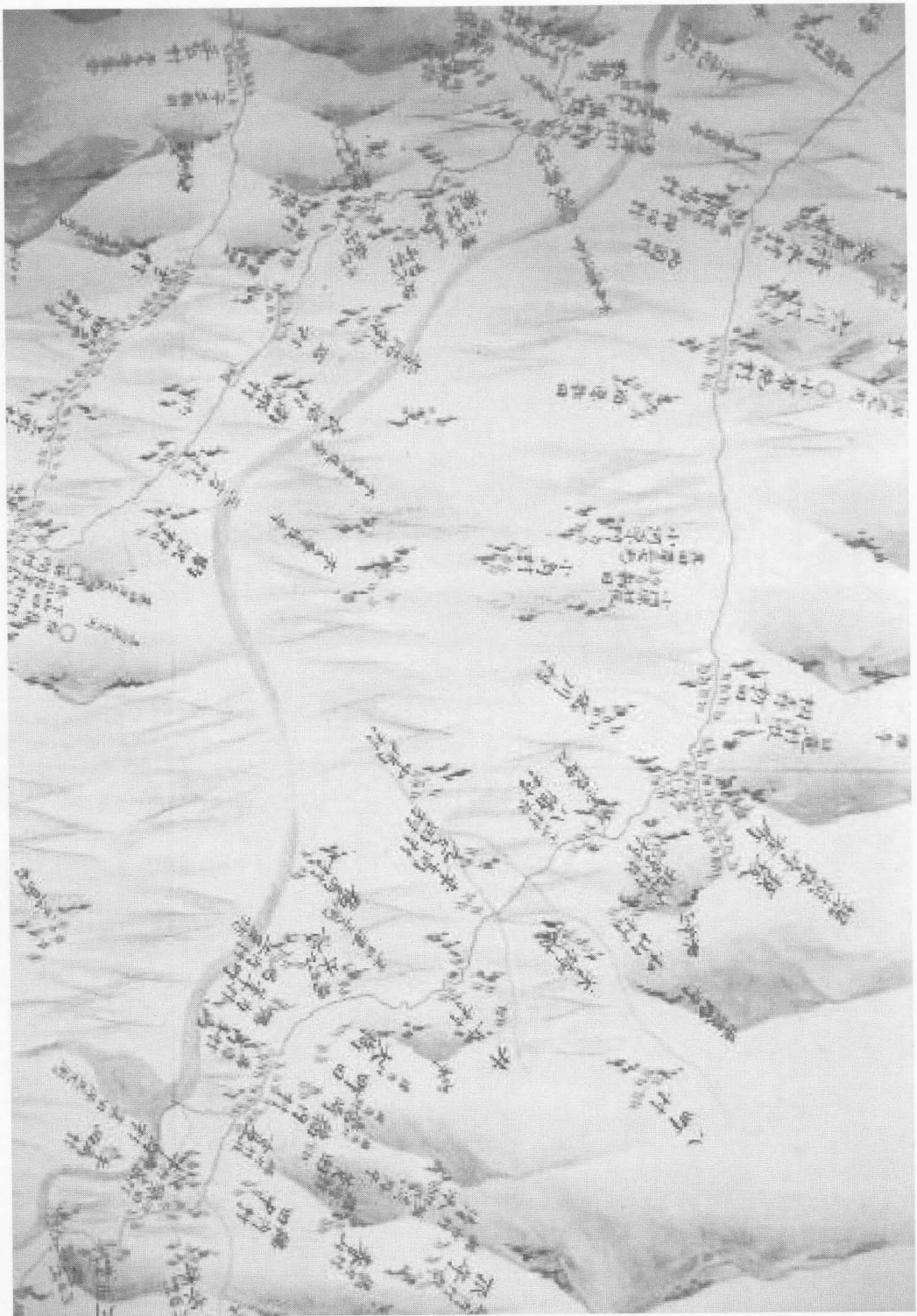
第1図は善光寺平の飯山付近である。享和二(一八〇二)年の第三次測量において越後国高田から北国街道を善光寺・上田と測量したが、第八次測量において文化十一(一八一四)年五月に松本から、善光寺を経て飯山まで千曲川の左岸・右岸を測量した。五月二日に飯山に到着し、飯山の市中を測量している。飯山は石高二万石の本多豊前守の城下町で、須坂への分かれ道に「イ」の杭を打ち、市中を測量した。「測量日記」には、木戸があり、向かって右に番所があった。そちらが上町、左には一向宗善覚寺、一向宗真照寺があり、本町には、左に制札があり、三辻となっている。第1図を見ると、飯山の街中で、測線が分岐しているが、この分岐が三辻に当たるのであろう。この三辻まで須坂道追分から九町九間(約1km)三辻の右は大手入口で、「横物大手前五町」と「測量日記」には記されているが、城の大手門まで五町(約五三〇m)ということであろう。左に進むと、

寺院が多数建ち並び寺町となっていたようである。そのさきは、番所があり、千曲川に沿い越後十日町に向かう道と越後高田に向かう道の追分となっていた。その木戸の右柱まで測って終わりとしている。飯山市中で途切れた測線の先がその木戸に当たると思われる。三辻からこの木戸まで十町六間(二・一km)であった。

五月三日飯山城下を二手に分かれて出発した。この日は、小布施村を通過し、須坂まで測量している。飯山の城下を出ると千曲川を渡る。



第1図 大図91号 飯山付近(下が北)



第2図 大図第81号 須坂付近

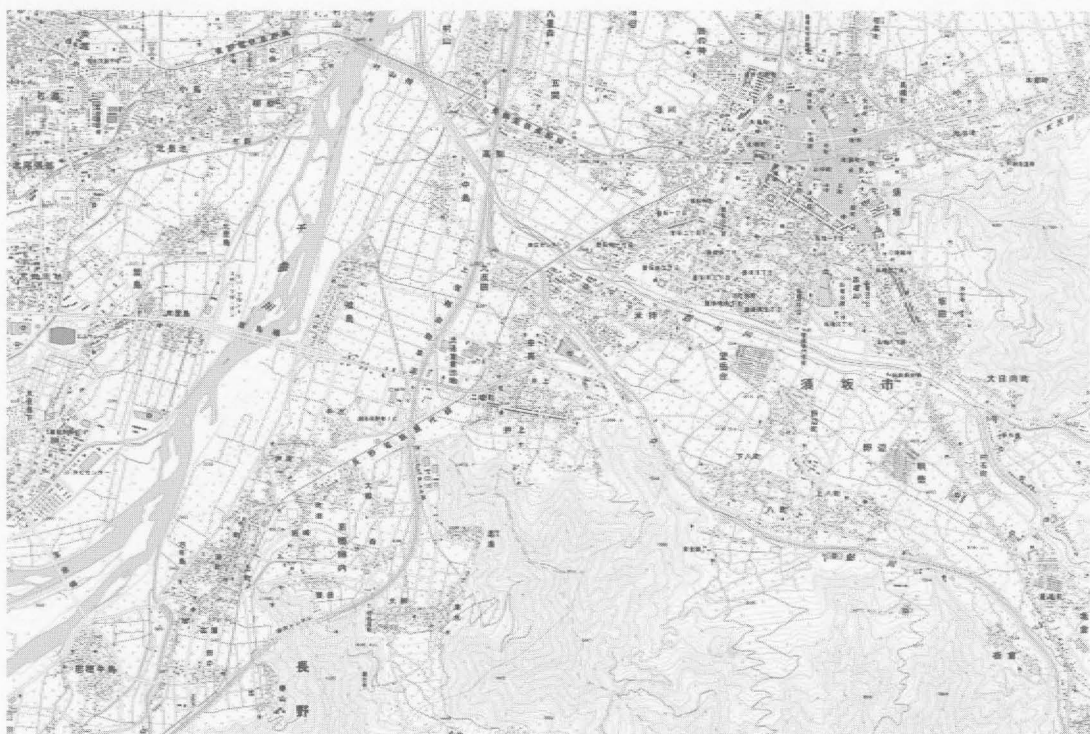
千曲川の綱取渡で幅一〇六間一尺五寸と「測量日記」には出ている。^{*} この川幅は測遠術で測った。小布施村は人家四〇八軒と「測量日記」にはあり、宿駅の記号もつけられた大きな村であった。小布施村の手前には、六川村があり、そこには熊野権現社があり周囲が五間(九m)ばかりの大きな槻(ケヤキ)があると記されている。また、六川村には、須坂藩堀近江守の出張陣屋があり、大図に描かれている大きな葺の建物はこの陣屋であろう。

須坂には、堀淡路守在所と記され、陣屋と思われる建物が描かれている。当時、藩主は堀淡路守直興で、一万五十石余の小藩であった。この日忠敬一行は、本陣に泊まり、藩の郡奉行ほか、町役人、松代の名主、本陣問屋などが挨拶に来たことが「測量日記」に記されている。

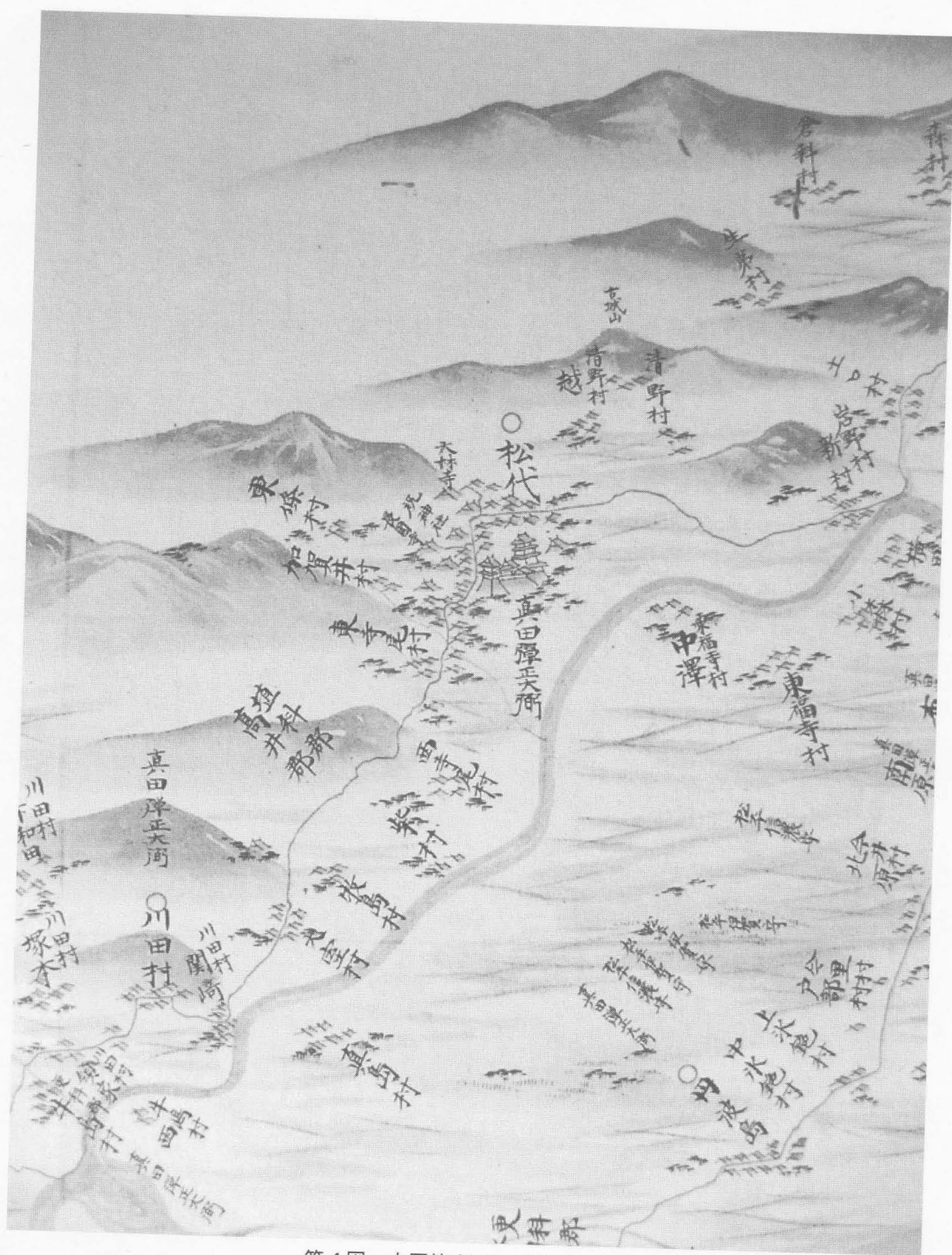
須坂では、松代へ向かう街道から分かれて須坂の市中を測量している。松代道の追分から大手入口、大門などを通り、須坂村と小山村の境まで四町五〇間二尺と「測量日記」には出ており、須坂市中の測線はほぼ直線なので約五三〇mに渡り人家が続いていたようである。須坂市中の家数は三八二軒と「測量日記」には記されている。須坂に入ると下町の右三〇間ばかりに浄念寺があり、左には制札場の四つ辻と「測量日記」には書かれている。大図に描かれている葺は、この浄念寺であろう。須坂の市中を抜ける測線を辿ると中山道の沓掛宿へ出る山越えの道となり仁礼街道と言うと「測量日記」には記されている。現在の地形図を見ると、仁礼という集落が街道を一〇km程行った先にある。

五月四日松代道を測量する。大図には墨坂神社が描かれているが、

^{*}佐久間達夫「伊能忠敬測量日記」には、「綱取渡」となっているが、地形図には、「綱切橋」が千曲川に架かっており、「綱切渡」の誤りの可能性もある。



第3図 2万5千分の1地形図 「須坂」



第4図 大図第81号 松代付近（下が北）

「測量日記」でも式内墨坂神社社領寄附米八石と記される。須坂市内には、墨坂神社が二社あり、大図に描かれた墨坂神社（「八幡村」の付近）と浄念寺のとなりに柴宮と呼ばれる墨坂神社とがある。大図には柴宮は描かれていない。墨坂神社には測線が分岐しており、神前まで一町二十四間（約一五〇m）であった。

松代までいくつか川を渡っているが、これらの川は無水の川が多かった。市川無水川原、鮎川無水川原と測量日記には記されている。市川は、現在は百々川と呼ばれている川に当たると考えられる。鮎川は現在の地形図にも鮎川と載っている。大図には、これらの川は黄色の線で表現されており、涸れ川であることを示している。千曲川に注ぐ支流の河川は、背後の高い山地から流れ出る河川で扇状地を作っている。扇状地は砂礫からなるため透水性が良く、渇水期になると涸れてしまうことも多い。江戸時代には上流にダムなどの施設もなく、自然河川に近い状態であった一方、用水などの取水は盛んに行われていたため、涸れ川となることも多かったであろう。

千曲川と犀川の合流点には、測線を分岐して牛島村の河畔の人家の所までわざわざ測っている。犀川の合流点は、犀川を花のつぼみのような形に描いている。ミョウガを縦に切ったときの断面のような形である。何故このような形に描いたのかよく分からないが、合流点まで測り、おそらくそこから遠望したのであろう。地形図を見ると現在は犀川と千曲川が鋭角的に合流しており、特に特徴的な合流ではない。伊能測量当時は、合流点での犀川の分流が著しかったのであろう。合流点では、菱川という東からの小河川が千曲川に注いでいるが、これも涸れ川として黄色く彩色されている。菱川は、現在は保科川と呼ばれているようである。この後、松代の城下に入り本陣に止宿した。

松代は、真田弾正大弼十万石の城下町である。家数三百九十三軒、



第5図 2万5千分の1地形図「松代」

大図には城郭や寺社の躰が多数描かれている。長国寺、大林寺、祝神社の注記がある。長国寺は、「測量日記」によれば、御朱印百石のほか真田家の寄附が二百石、真田家歴代の墓所である。真田家初代の真田信之の霊屋は、国の重要文化財に指定されている。大林寺は、真田信之の母寒松院の墓所がある。祝神社は式内社で、歴代藩主の崇敬が厚かったと言われているが、天明八年に火災で焼失し、文化九年に再建された。伊能測量時には、再建なったばかりの社殿に参詣したものである。このほか、「測量日記」には大英寺、御朱印百石の記載があるが、大図には注記がない。大英寺は、真田信之の妻小松姫の墓所があり、現在の本堂は小松姫の霊屋を改装したもので長野県宝となっている。松代から屋代へ出て善光寺街道に繋いだ。

善光寺・姨捨山

飯山、須坂に先立ち四月二十九日には更級郡稲荷山を出発して善光寺に着いた。善光寺は、享和二年十月第三次測量において、高田城下から上田城下に向かう際に通過している。永井要助の支隊は、第三次測量において測量した所は一部重測したが、無測で通過し善光寺に着いている。一方、忠敬の本隊は、姨捨山に測線を延ばしている。

四月二十八日には、麻績宿から猿ヶ馬場峠を通過しているが、この間にも、法善寺、長福寺、治田神社、竜洞院と言った寺社に寄っている。麻績町の法善寺には測線が分岐し、「測量日記」には、「此より法善寺に打上、横三町十二間」とされているので、約三五〇m街道から入っている。法善寺は、曹洞宗佛眼山と言い、御朱印は八石、本尊は釈迦如来と「測量日記」には記されている。釈迦如来の座像は麻績村の指定文化財である。長福寺は、桑原村に描かれている大きな躰がそれ

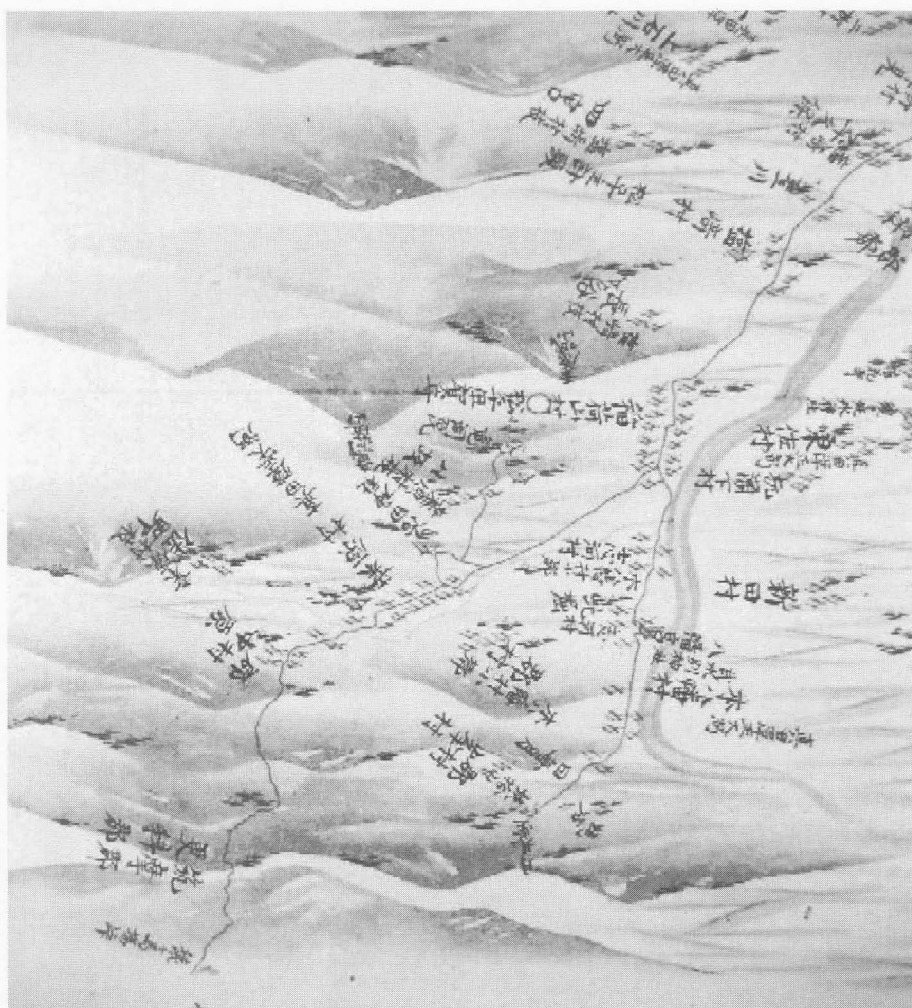
に当たるものと思われる。

桑原村から稲荷山村の間では、大図に描かれている竜洞院と治田神社に測線が分岐している。治田神社は上社と下社とがあり、大図に治田神社と注記がある方が上社で上諏訪大明神とも言われていることが測量日記には記されている。桑原村の集落から治田神社への分岐測線が細流を渡るが、この川は伊沢川で幅三間(五・四m)と測量日記に書かれている。社前まで分岐から二町五四間と書かれており、約三一五m街道から入り込んでいる。

続けて竜洞院に向かいさらに測線を分岐する。竜洞院に向かう途中、右三町(約三三〇m)ばかりの森の中に治田神社下社を見る。下社まで測線をのびさなかったが、遠測したことが測量日記には記されており、下諏訪大明神と言われていることも書かれている。竜洞院に向かう測線の右側に描かれている躰が注記はないが治田神社下社であろう。竜洞院は、遠州袋井の可睡斎の末寺で本堂に釈迦如来像があり、御朱印は十五石と「測量日記」には記録されている。釈迦如来像は、「弘法大師作武田信玄より代々拝領」とされているが、千曲市の指定文化財を調べてみると、竜洞院に指定された仏像はない。竜洞院の本堂まで測線が延びている。

麻績宿から稲荷山村の間は、山道である。麻績宿から猿ヶ馬場峠までは、現在の国道四百三号線に沿った道を行くが、猿ヶ馬場峠から桑原村までの下りは、国道四百三号線を離れ、郡村中原まで降りていく。この道は地形図には見られない。猿ヶ馬場峠には、「湖あり、周五百五十七間(約一km)」という」と「測量日記」には書かれており、現在の聖湖である。現在周囲は、別荘地やスキー場、ゴルフ場があり、観光地となっている。

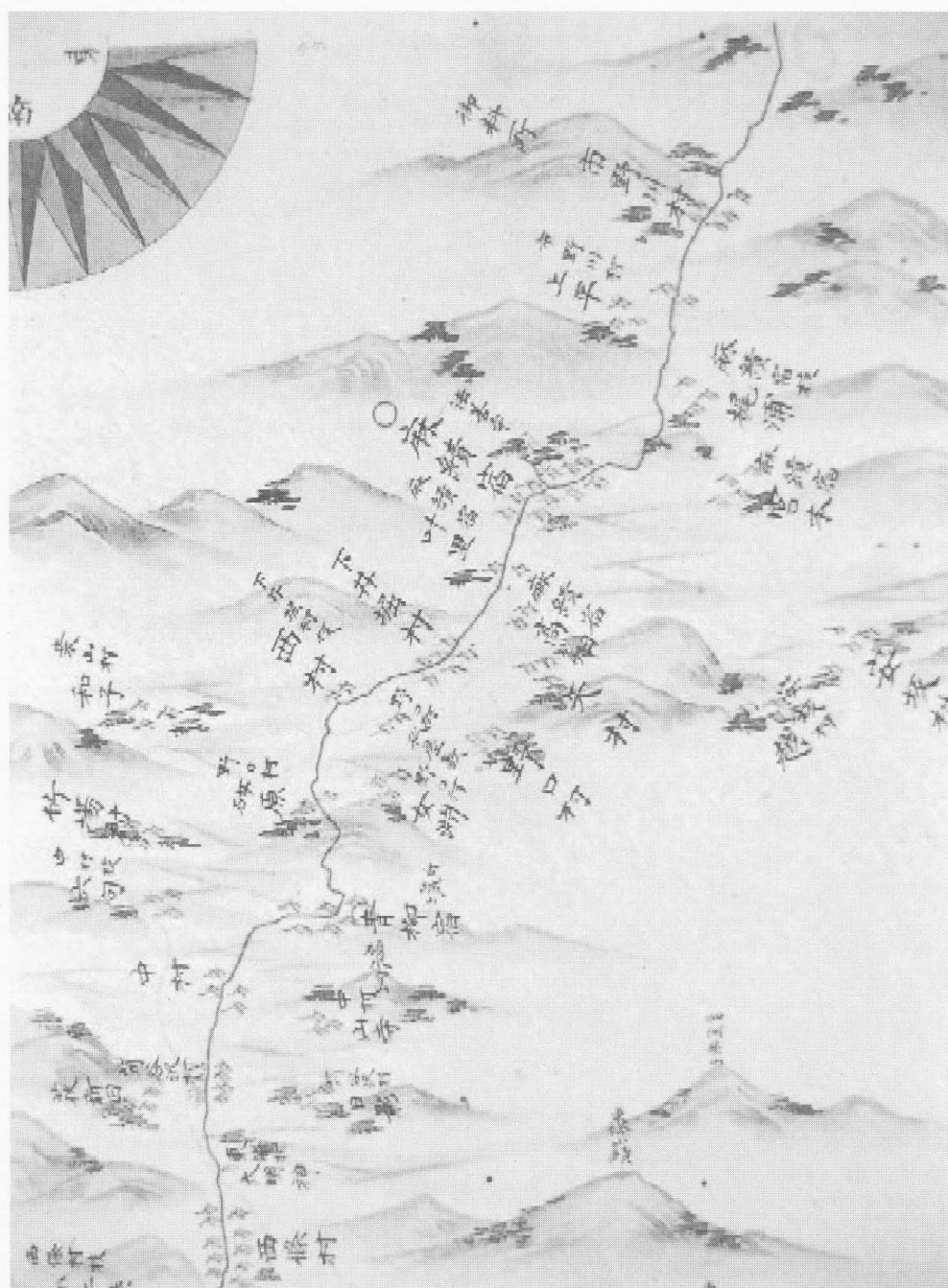
姨捨山に向かった忠敬本隊は、志河沢を渡る。「志河沢水無」と「測



第6図 大図第81号 稲荷山付近



第7図 2万5千分1地形図 「稲荷山」



第8図 大図第96号 麻績付近



第9図 2万5千分一地形図 「稲荷山」「麻績」

図の右上が稲荷山、左下が麻績村である。中央左の聖湖の北に「猿ヶ馬場峠」がみえる

量日記」には記されているが、大図では青い線で引かれている。本八幡村には、式内社である武水別神社があり、「神領御朱印二百石、内百石別当天台宗清浄山神宮寺」と測量日記には記され、神仏習合の時代の寺院と神社の関係を示している。武水別神社には、長野県宝の指定を受けた灯籠や銅剣が残されている。

本八幡村の家並みが続き、更級川という小流を渡る。更級川は、地形図を見ると、現名も更級川で、大図では本八幡村の外れのあたりで千曲川に注ぐが、現在は、武水別神社の脇を流れさらに下流で千曲川に注いでいる。

その先は名所「田毎の月」である。小袋石、姪石があり、月見堂の登り口に芭蕉塚がある。高さ十間（一八m）、横七間（一二・六m）ばかりの姥石があり、月見堂からの眺めは、周囲の山々、千曲川の流れが絶景であると「測量日記」には記されている。さらに、「測量日記」には、更級十三景、即ち「姥石」、「姪石」、「甥石」、「小袋石」、「桂ノ木」、「二重山」、「有明山」、「更級川」、「宝ノ池」、「田毎月」、「冠着岳」、「鏡台山」、「千曲川」が列記されている。そして、紀貫之などが姨捨山の月を詠んだ古歌を書き記している。忠敬の教養が披瀝されているところである。

使用した伊能大図はすべて国立国会図書館所蔵のものである。使用した地形図はすべて国土地理院発行二万五千分一地形図の縮小である。「測量日記」は佐久間達夫『伊能忠敬測量日記』によった。

（ほしの よしひさ・代表理事・（社）日本測量協会副会長）



新刊紹介

※価格は本体価格（税抜）

『日本史リブレット 伊能忠敬』

日本をはじめて測った愚直の人

星埜由尚

八〇〇円

山川出版社

内容

忠敬の愚直なまでの全国測量にかけた情熱とその背景を考える

『天地明察』

沖方 丁 一、八〇〇円

角川書店

内容

渋川春海の生涯を描き「吉川英治文学新人賞」「本屋大賞」等を受賞した賛否両論の話題作



『伊能忠敬の秋田路』

佐藤晃之輔 一、七〇〇円

無明舎出版

内容

伊能忠敬が秋田に残した足跡を文献の解説と現地調査で克明に辿る

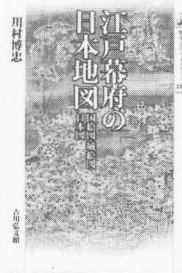
『江戸幕府の日本地図』

川村博忠 一、七〇〇円

吉川弘文館

内容

国絵図 城絵図 日本図 幕府の全国統治と地図「日本地図」誕生の歴史



「夷屋」を捜し求めての旅

大沼 晃

江ノ島は、隆起海蝕台地の特徴を有し、古くから信仰の霊地として有名であり、歴史と景勝の地として「史跡名勝」に指定されている。（会報五八号一四頁参照）二三頁掲載の古絵図（文化三年「一八〇六」、幕府が命じて描かせた五街道分間絵図の東海道に付属する「江ノ島道」に描かれている江ノ島の部分）と現在の景観との大きな違いは強いいてあげるとすれば三つある。

第一は、橋の有無である。測量日記では「江ノ島の渡。汐干にて歩行なり」と記述しているので、渡し舟を使わず引き潮時に島に渡ったことが分かる。当時、江ノ島詣での人々は徒歩で渡ったのである。島に弁天橋が架かったのは明治二十四年。木造であったため台風のたびに流失。昭和二十四年、橋げたが鉄筋で上部が木造の橋が架かったが、現在のような立派なコンクリートの橋になったのは昭和三十九年の東京オリンピックのヨット競技の地になったときからであり、弁天橋の隣に平行して自動車専用道路「江ノ島大橋」が架かり利便性が高まった。（会報第五八号三七頁 石谷春香会員の記事参照）

第二は、聖天嶋や鶴ノ島の周辺を掘削し、東京オリンピック時に日本で初めての競技用ヨットハーバーを作ったために辺りの景観が様変わりしたが、江ノ島や湘南の海に溶け込み違和感を感じない。

第三は、道路・交通網の発達に伴う日帰り観光客の増加。宿泊客の減少に伴い旅館業の衰退。廃業や土産物屋への転業が進む中、はたして忠敬先生が宿泊した旅籠「夷屋」は現存しているのか。当時の旅籠はどのような様子であったのか、「江ノ島まうで濱のさざ波」（天保四

年「一八三三」発行Ⅱ会報五八号六頁参照、以下案内書と称する）を基に「夷屋」を捜し求めて旅に出てみよう。



大正年間の江ノ島神社大鳥居付近。参道の左手に「ゑびすや茂八」の看板が見える。

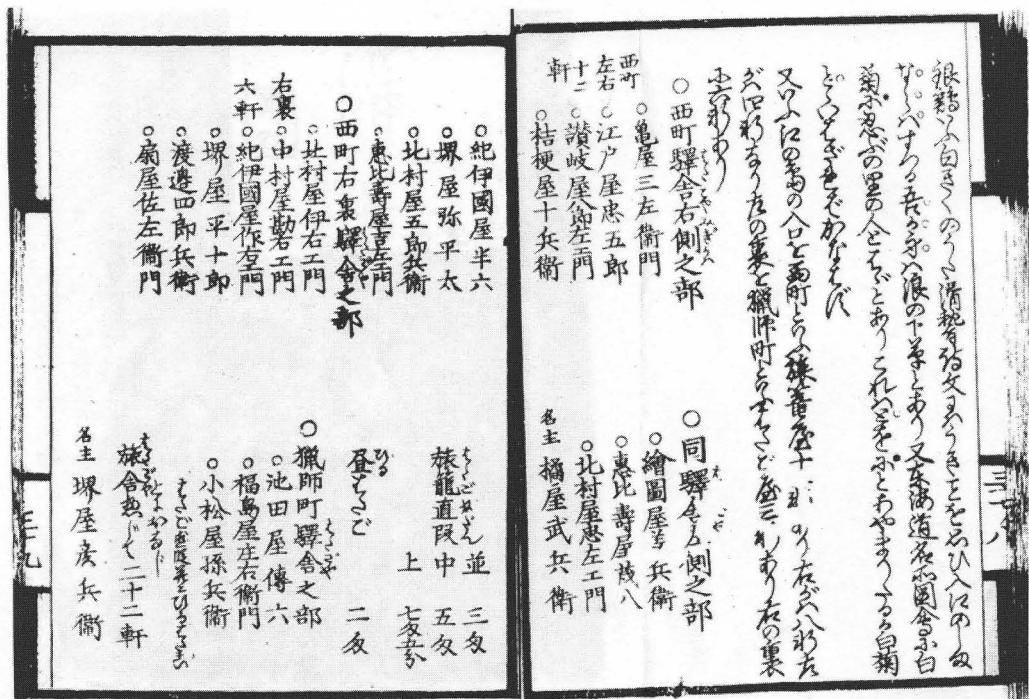
判明 その一 当時の旅籠は民宿並みであつた

案内書によると、大鳥居をくぐり神社に向かつて右側に龜屋三左衛門、江戸屋忠五郎、讃岐屋八郎左エ門、桔梗屋十兵衛、紀伊国屋半六、堺屋弥平太、北村五郎兵衛、恵比寿屋吉左エ門の順で八軒の駅舎※があり、その右裏には、北村屋伊右エ門、中村屋勘右エ門、紀伊国屋作右エ門、堺屋平十郎、渡邊四郎兵衛、扇屋佐左衛門の六軒。左側には、絵図屋善兵衛、恵比寿屋茂八、北村屋忠左エ門、橘屋武兵衛（名主）の順で四軒。さらに大鳥居を左に曲がり海岸寄りの狛師町に池田屋伝六、福島屋庄右衛門、小松屋孫兵衛の三軒。総計二十二軒の旅舎※があつたと記述されている。（※注、別の江ノ島案内図には当時の旅籠は「民宿」の名称で記載されている。島の旅籠の元は坊であり、上の坊・岩本坊・下の坊・さぬき坊があり、島に来る講中はそれぞれ縁故のある坊に泊まつた。講中以外の参詣客のための旅籠は現在で言う民宿並みであつたようだ。）

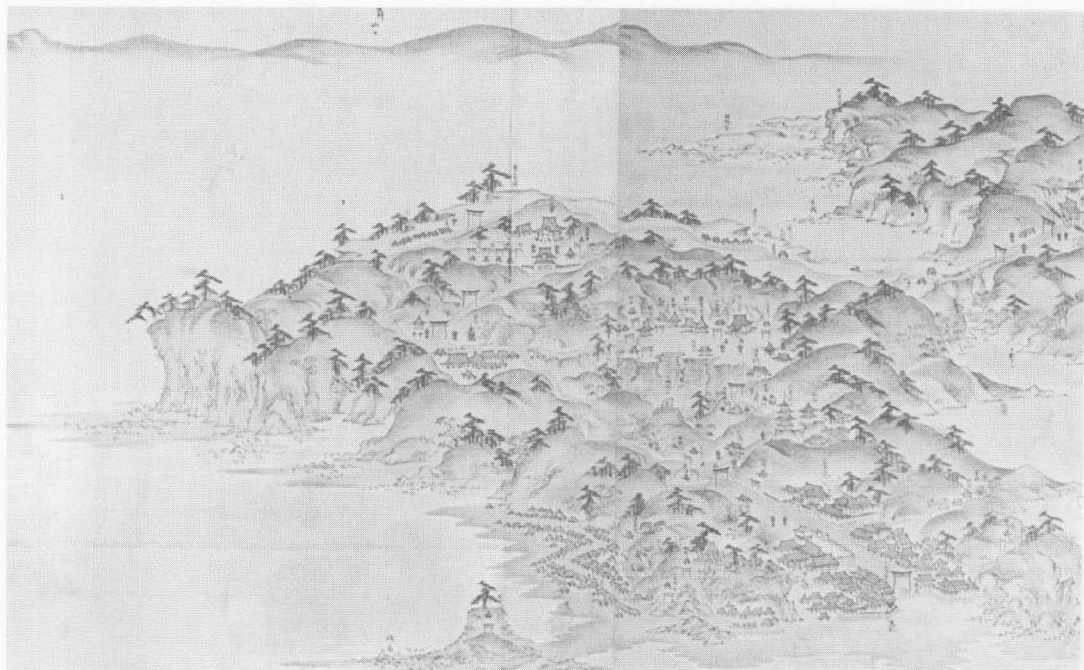
判明 その二 止宿先は手がかりなし

さて「夷」は「恵比寿」の漢字に当てはまるので止宿した「夷屋吉右衛門」と思しきところは「恵比寿屋吉左エ門」と「恵比寿屋茂八」の二軒。一番似通っているのが「恵比寿屋吉左エ門」であるが、考えられることは、忠敬が聞き違いによる「右」と「左」の記述違いか、それとも後世、漢字の崩し字の誤読による間違いなのか、今のところ判断がつかない。

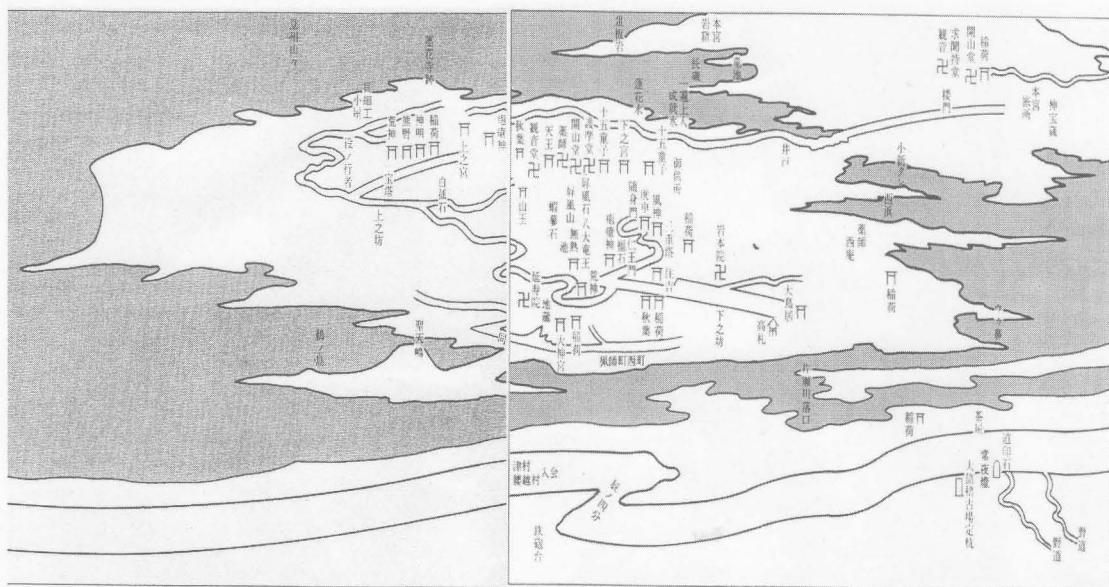
次の「恵比寿屋茂八」は創業三五〇余年続いている現在の「御料理旅館 恵比寿屋」である。ご子息が二十代目で、ご自分はサポート役に徹している永野緑三専務さんに面談したところ、十三代目は永野市衛門と名乗っていたが、いつからいつまでなのか年代がはっきりして



天保4年（1833）発行の案内書「江ノ島まうで濱のさど波」には「恵比寿屋」が2軒みえる



江ノ島の古絵図



江ノ島の解説図

いないし、古い昔のことで当時の宿帳など資料がないためお泊りになったのか不明である」と恐縮していた。

岩本楼（明治初年、神仏分離により岩本院が旅館業へ変わる）は別格として江ノ島で最古の旅館であり、弁天橋から島を見上げると宿の屋根の上に「ゑびすや」の大きな文字が目につく。満潮のときは大鳥居の前まで海水が来ており、子供のとき良く遊んだそうだ。広大な敷地内に少し前まで大森貝塚発見で有名なモース先生の海洋研究所もあったとのこと。

二軒とも屋号が「恵比寿屋」となっているので、昔は親類縁者であったのかと問うたら、「何分、昔のことだから」との答えであった。残念ながら九五年度発行の藤沢市教育委員会作成資料によると「恵比寿屋吉左エ門」跡は建物一部改修現存し、進藤さんという人が居住と記されている。

判明 その三 旅籠の値段

案内書によると、並みで三匁、中で五匁、上で七匁五分、昼旅籠二匁となっており、一匁〃八五文とし、現在価値で四文〃百円で計算すると六千五百円〜一万六千円ほど泊まれたようである。民宿であるから納得できる料金ではなからうか。

判明 その四 旅籠の造作

藤沢民俗文化によると「恵比寿屋」は三階建。明治二八年発行の「漫遊案内東海道編」によると「えびすや茂八」は崖には別荘を設け眺望も又佳しと記述されている。もう一つの恵比寿屋の名前は消えている。

判明 その五 忠敬は敬神家

測量日記二十二日条に「朝曇。六ッ半より右の海辺を測量し、三弁天へ参詣。岩谷迄相測、止宿にて昼食をなす。江ノ島の役人は勿論、下の坊目代森利右衛門、次上下出入共送迎。（後略）」と記述している。

三弁天とは、本宮旅所（奥津宮）、下之宮（中津宮）、上之宮（辺津宮）のことで、三女神（宗像大社に祭られている天照大神の三柱の御子神で、タキリビメ・タキツヒメ・イチキシマヒメを指す）を分かち祀っている。岩谷は本宮岩窟のことで弁天様を祀っている。島めぐりしたことをわざわざ日記に残していることは、忠敬の信仰心の篤さを表しているのではなからうか。

（おおぬま あきら）



研究レポート『伊能忠敬』(十)

忠敬の見た風景(その四)

四日目 八月八日 晴れ

石谷 春香

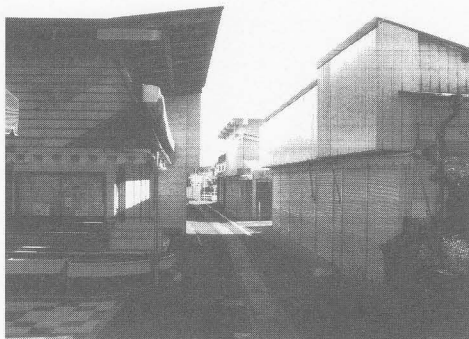
朝食を食べて出発です。
今日は八景島まで行きます。

民宿の人が「もうでかけるの？
がんばってね！」と声をかけて
くれました。

スタートです。

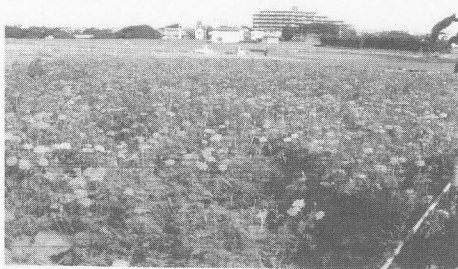
おみやげやさんはまだ閉まっ
ていました。

朝なのでまだだれもいません。



城ヶ島大橋を渡るため坂を上ります。

橋を渡ります。



風車があります。

すると今度はまっすぐな
下り坂です。

気持ちがいいです。



富士山も見えます。

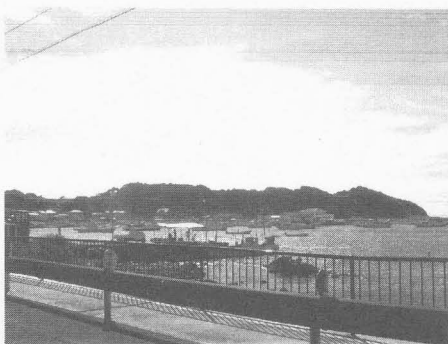
橋を渡って右に行きます。お
花畑がきれいです。

宮川橋を渡ります。

毘沙門湾を通ります。

毘沙門トンネルを通ります。

江奈湾を通ります。



ようやく上って先にすすみます。
するとまた下り坂です。

らくちんです。



自転車を押して上ります。

また上り坂です。今度はきついです。

ヤマザキシヨップでアイスを食べます。

Y ヤマザキシヨップ
三浦フジモ商店
☎ 046-876-0050
毎度ご利用ありがとうございます
又のご来店をお待ちしております
2007年 8月 8日(水)No0

アイス	氷	¥241
ソフト	ドリンク	¥147
小計		¥388
合計	言十	¥388
(うち消費税)		¥18
お預り		¥500
お釣り		¥112

点数 2
2賣 5246 8時53分

下りたところでなんだか自転車が変わです。
自転車調べてみると後のタイヤの空気が抜けています。
大変です。

でもだいじょうぶ!

百円均一シヨップで自転車用のポンペを買っておいたのです。
よかったです。

もし何も用意していなかったらこんなところで大変です。

先に進みます。

海がきれいです。



このあたりは三浦海岸です。
海岸に沿ってある駐車場の
中を進みます。

走りやすいです。
しばらくは駐車場の中でよ
かったのですがそれが終わ
ると歩道です。

かもめがとんでいます。

18 横須賀市東

途中で右に曲がります。

進みます。

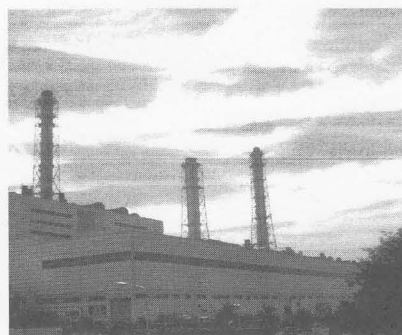
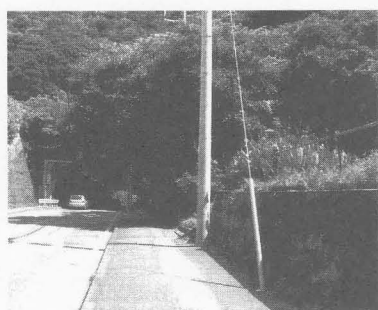
海岸にはだれもいません

海がきれいです。



ずっと走ってきた三浦半島が見えます。

千駄ヶ崎トンネルを通ります。



東電横須賀発電所があります。

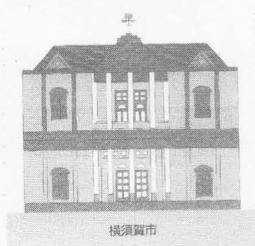
フェリー乗り場があります。

神奈川県久里浜と千葉県金谷を結ぶフェリーです。



ペリー記念館

Perry Memorial Hall



少し進むとペリー記念公園があります。

一八五三年（嘉永六年）のペリー上陸を記念する公園です。

公園の中には記念碑とペリー記念館があります。

記念館はちよつと小さいです。
入場は無料です。



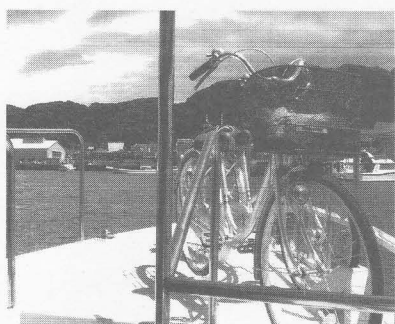
開国橋で信号を待っていたらなかなか青になりません。

だいぶまって歩行者のボタンを押さなければならぬのに気がつきました。

川間トンネルを通ります。

進みます。

少し行くと浦賀の渡しがあります。



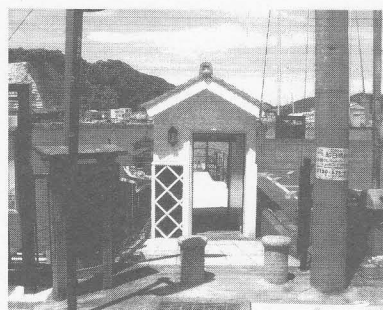
そこは船で向こう側にゆくことが出来ます。

乗ってみることにします。

船は今行ったばかりでしたがすぐもどってきてくれました。

料金は中学生が五〇円、自転車が五〇円です。

自転車を自分で船に乗せます。



そして出発です。

なんだか気持ちいいです。



五分ぐらいでつきました。
おもしろいです。
出発です。



海の近くをとおります。

観音崎大橋を渡ります。

ちょっと疲れてきたのでお昼にすることにしました。

マテリアというお店にはいります。

なんだか感じのよいお店です。
パスタのセットを頼みます。

席からは海がきれいにみえます。

このあたりは観音崎です。

観音崎は「かながわの景勝五〇選」「かながわの公園五〇選」

「かながわの未来遺産一〇〇」に選ばれています。

ゆっくり休んだので出発です。

観音崎トンネルを走ります。



少し行くときれいな建物があります。

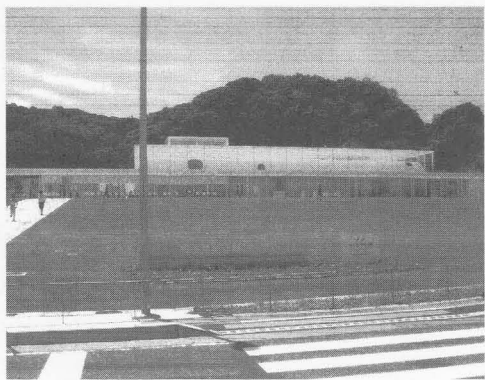
横須賀美術館です。

美術館は平成一九年四月二八日にオープンしたばかりの美術館です。

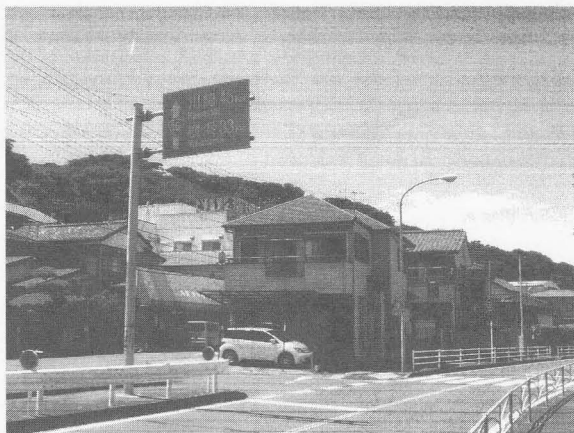


向こうから人がきたのでトンネルの入口で待ちます。
進みます。

海岸に出ると人がたくさんいます。

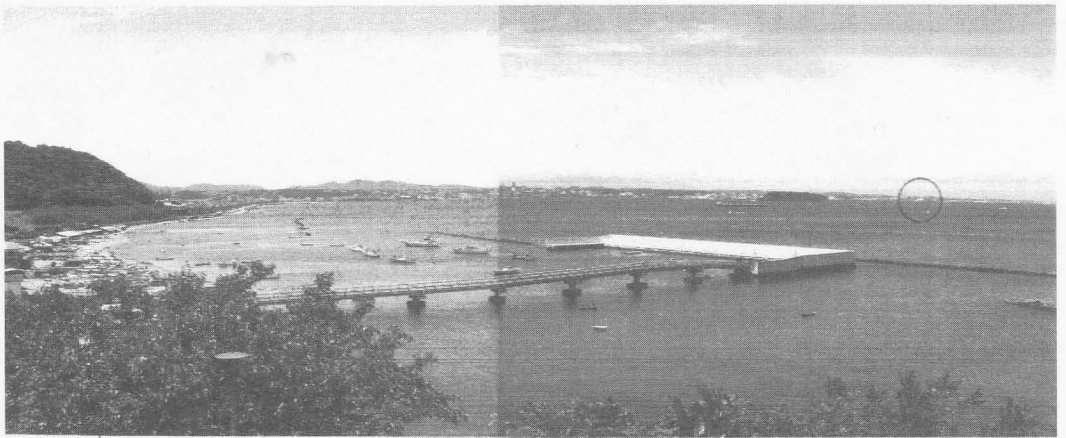


川崎まで四十五kmの標識があります。

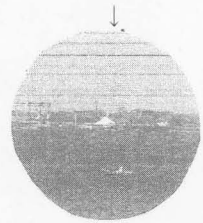


初めて川崎の名前ができました。

また上り坂です。



写真上の円内の拡大図



坂を上ると景色がよくなります。

よく見ると八景島の水族館の三角の建物が小さく見えます。

がんばります！



まっすぐな道をすすみます。とてもまっすぐです。まっすぐ！ まっすぐ…

このあたりは横須賀マポリシーハイツと呼ばれていて「かながわのまちなみ一〇〇選」に選ばれています。

リヴィンのミスタードーナツに寄ります。

あまり暑いので二はい飲みます。

少し休みます。

そして出発！

Mister Donut
No. 1459
LIVIN横須賀ショッ
電話046-828-8438

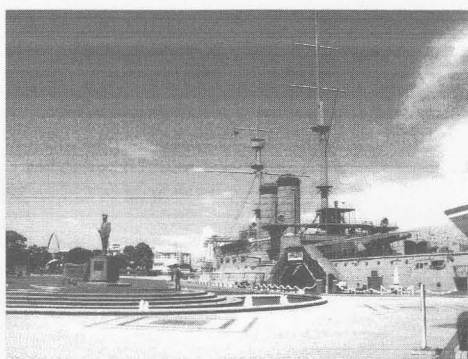
いつもご利用ありがとうございます

2007年08月08日(水)	12時44分
メロンソーダ	1点 ¥189
グレープソーダ	1点 ¥189
合計	¥378
(内、消費税等)	¥18
現金	¥1,000
釣銭	¥622

パート・アルバイトさん 募集中心
お気軽にお電話ください(。・。)/

店No:01

店No:5527



三笠公園の前を通ります。

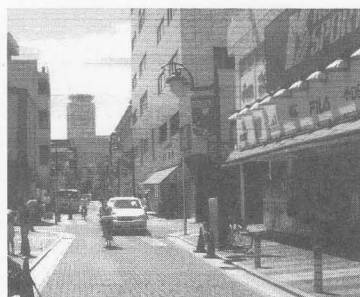
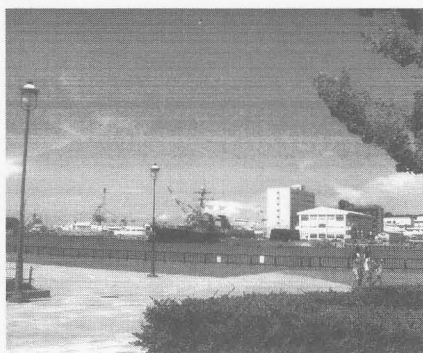
三笠公園は「かながわの未来遺産一〇〇」「かながわ公園五〇選」「日本都市公園一〇〇選」に選ばれています。

三笠公園には「三笠」があります。

「三笠」は明治三七年の日露戦争で使われた戦艦です。

海軍カレーがあります。

海軍カレーは「かながわの未来遺産一〇〇」に選ばれています。



横須賀ドブ板通をとおります。

ここは「かながわのまちなみ一〇〇選」に選ばれています。

以前この通りにドブ川が流れていたので呼ばれています。お店がたくさんありますが、もともとアメリカ兵相手のお店が中心でした。「スカジャン」の発祥の地でもあります。

ベイスクウェアよこすかの横を通ります。

ヴェルニー公園のところを通ります。

さらに進むと行き止まりになってしまいました。

少しもどってＪＲ横須賀駅のふみきを渡りました。

新逸見トンネルを通ります。
新吉浦トンネルを通ります。
長瀬トンネルを通ります。

吾妻トンネルを
とおります。

田浦トンネルを
通ります。



船越トンネルを通ります。

日向トンネルを通ります。

榎戸トンネルを通ります。

追浜トンネルを通ります。

進みます。

19 横浜市金沢区

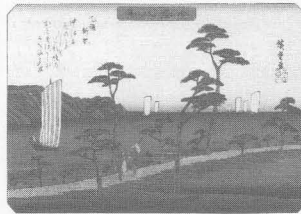
夕照橋です。

この橋は「かながわの橋一〇〇選」に選ばれています。

このあたりは金沢八景と呼ばれています。

昔、八つのきれいな景色があったからそう呼ばれています。

金沢八景は「かながわの未来遺産一〇〇」に選ばれています。



金沢八景の一つが「野島の夕照」です。

橋を渡ります。

海ぞいを走ります。

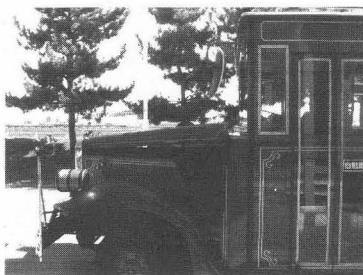
金沢シーサイドラインがあります。

金沢八景の一つに「乙艦の帰帆」おつとも きほんがあります。

シーサイドラインの下を通って行きます。



そしてようやく、ようやく八景島の駐輪場に到着です。
自転車を止めます。
もうふらふらです。
ちょうどそこにかわいいバスがきました。



ホテルの入口まで行くそうなので乗って行くことにしました。
もう歩けないと思っていたので助かりました。
一〇〇円を払います。



いすにどっかり座ります。
バスは金沢八景大橋を渡ります。橋は「かながわの橋一〇〇選」に選ばれています。

バスは八景島シーパラダイスの中に入ります。
シーパラダイスは「かながわの未来遺産一〇〇」に選ばれています。
八景島には遊園地と水族館があります。

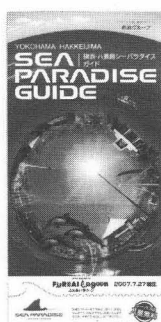
水族館はアクアミュージアムとドルフィンファンタジーがあり、今年の夏にさらにふれあいラグーンができました。

そしてホテルシーパラダイスインに到着です。
部屋は三〇二号室です。
部屋に着きました。

メーターを見ると二四九・七七kmになっています。

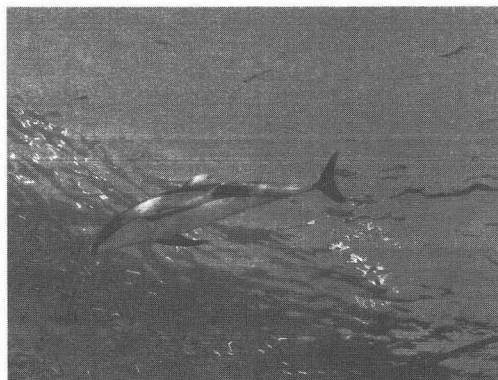


疲れました。
と、言いたいのですが窓からシーパラダイスが見えます。
さっそく、行きます！
まずはアクアミュージアム。すいそうのトンネルを通ります。



つぎはドルフィンファンタジー。
イルカを下からみず。
とてもかわいいです。

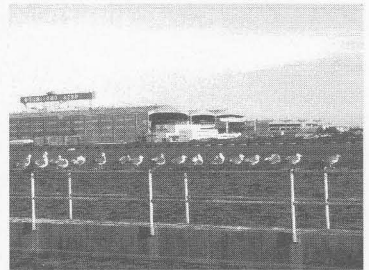
つぎはおみやげ!!
それから
ジェットコースター!!





疲れた…

なぜかかもめが
並んでいる…



夕焼けはとってもきれいです。

次にふれあいラグーン。

サメやなまこを触りました。

夕食はラ・タラフクでバイキング！

わたあめがあつたのでなんども
行きました。

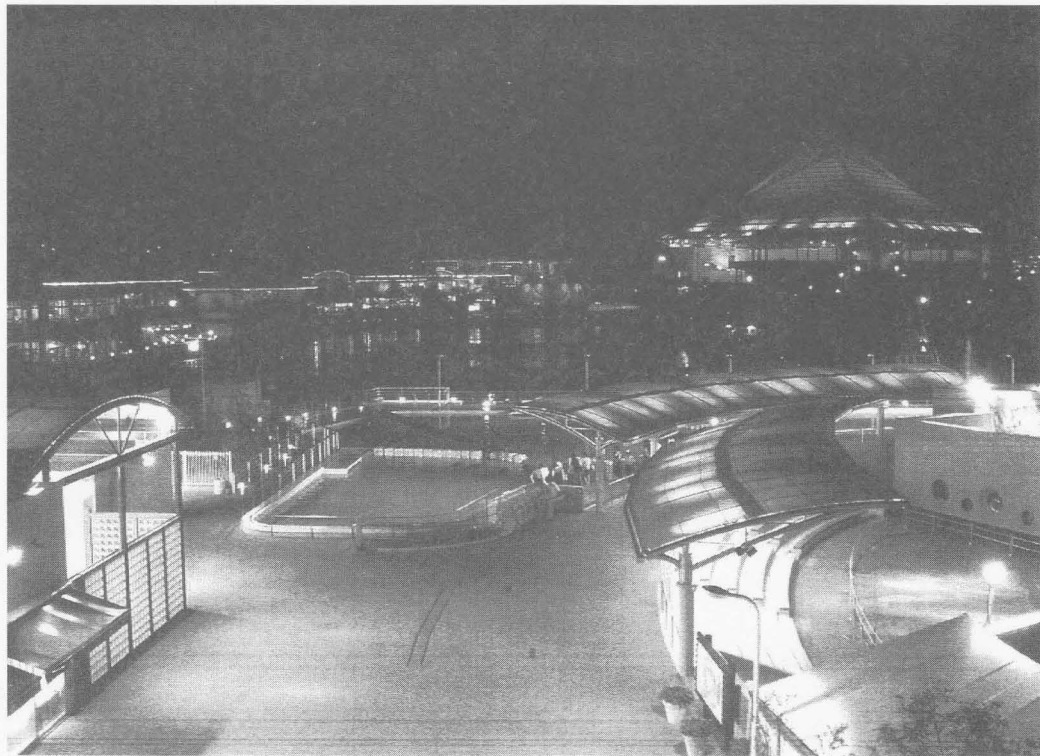
展望台に行つて、
それからもう一回ジェットコースター!!
もう寝ます…



つづく

(いしやはるか・文教大学付属高等学校二年)

「伊能忠敬の見た風景」行程



4日目 夜の八景島シーパラダイスです

ロシアでの武揚

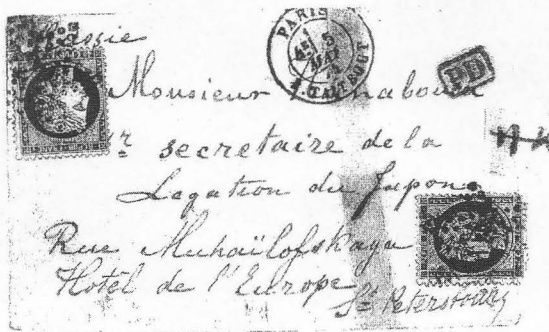
伊藤 栄子

明治維新直後の日本政府は国内でも政權確立間もなくであり、ましてや対外問題の解決のために積極的に乗り出す余裕は無かった。その上明治三年十月にやっと公使駐劄制度ができ、外務省に大弁務使（特別全權公使）中弁務使（弁理公使）少弁務使（代理公使）などを授けたが、その職を務める肝心の外交官になる人物がいなかった。長かった鎖国のために洋学といえば唯一オランダ語のみで、黒船の御見舞を受けてから、やっと幕府が英語の学習を認めたばかりであった。ヨーロッパでは公用語に近いものとしてフランス語が使われていたという。地続きのヨーロッパでは種々の民族が交錯し、長い歴史の間に言語も広まった。それ迄の門戸を閉じていた時代の日本で、急に世界に通用する人物が育つ筈はなかった。

明治六年政府は樺太問題について交渉の為めロシアへ派遣する全權公使の人選を急いでいた。中央では寺島宗則、井上毅、伊藤博文などが候補に上ってはいたが、黒田清隆は榎本武揚を強く推していた。勿論榎本は箱館戦争から余り経っていない頃であり、時の政府に抗した国賊にも等しいに拘わらず黒田が榎本を推挙したのは、彼が榎本の人物をよく知っていたからであった。その一は箱館戦争の終結直前榎本から黒田へ贈られた「海律全書」で、武揚はオランダ留学で本格的に国際法を学び他の推よりも理解していたこと。二には榎本が出獄後、開拓使に出仕した時北海道開拓がロシアの侵入の防波堤となるべき事を意識していて、ロシアの事情の究明の必要がある事を黒田は友人と

してよく理解していた。黒田の強力な推薦により、ついに閣議で榎本のロシア派遣が決定した。

その頃のヨーロッパ外交官の社交界では、将官の肩書きが必要であり威厳を持つものと考えられていた。当時日本では海軍の階級は大佐以上のものは無く、榎本が始めて海軍中將に任命されたのである。その上樺太境界についてロシア政府と談判のために全權を委任された。こうして明治七年（一八七四）武揚は横浜を出立してロシアに向った。ここに揭示した封筒の表書きにもある様に、当時ロシアの首都ペテルブルグには日本公使館の建物はなく、ホテルに仮住まいであった事が分かる。手紙は前任者代理公使の花房氏へ、パリからの武揚の第一報であった。



ロシア

花房様

日本公使館書記官

ミカエロフスカヤ通り

ヨーロッパホテル

サンクト・ペテルブルグ

武揚の手紙によれば、去る三月十日出帆、海陸無事に五月一日に一行は法京巴里に安着した。同行者は市川文吉二等書記官、山本清堅二等書記生外二従者二人の五名であった。法京というのは、フランスの漢字名：：法郎西の法をとり、その京：：みやこの意でパリのこと。

(仏蘭西、弗蘭察、仏郎西など多数ある) 三月十日に出立して五月一日に着き二ヶ月近い旅であるが、今度はスエズ運河も開通していてもオランダ留学の時より短縮された。文中日本では、天皇始め皇室の方々も御安泰になされ、在朝諸大臣も障り無く、全て静謐であること。先ず皇室の事から始まるのは、維新後間もない明治の人の手紙らしい。

武揚が何故パリへ寄ったかといえば、正式な外交官としての立場上から、先ず海軍中將としての服装を整える必要があった。大小礼服等眺めのため何日か滞在しなければならぬ。服装に関しては当時からパリは欧州の中心的な街として近隣諸国にも聞こえていた。武揚はパリでロシヤ皇帝に謁見の為め海軍中將の大礼服を七百両も出して作った。勿論一張羅で済む訳はないから、何枚か眺えたであろう。欧米の社交シーズンは大体秋から冬にかけてで、真夏はゆつくり避暑に出ることが多い。武揚はパリからオランダに行き、留学中に世話になった人々に会い、ベルリンを通じてロシヤへ向った。

(この封の表書きの訳は、夫が兼て社会人になった頃フランス語とロシヤ語は、少々習った事があると聞いていたので頼みました。)

花房義質(岡山生れ、早くから児玉順蔵らに洋学を学び、緒方洪庵の門にも出入りした。慶応三年藩に無断で長崎を発し、単身フランスへ渡り留学の途につく。パリ万博を視察し、ついで英、米両国を見学

し明治元年帰国する。同二年外務権少丞に任じ、中国、朝鮮に赴いて外交に従事し、同六年外務一等書記官としてロシヤに行き、九年代理公使となる。十三年弁理公使として朝鮮に赴き壬午の変にあうも、却って済物浦条約を締結するを得た。後、枢密顧問官、日本赤十字社々長、子爵)

これから武揚の活躍の本拠地となる「サンクト・ペテルブルグ」について歴史をみると、この都は古くロマノフ王朝第五代のツァーであり初代ロシヤ皇帝のピョートル大帝(在位一七一―一七二五)により、バルト海に注ぐネバア川の河口に建設された。当時、西欧化改革を強力に推進していた大帝は、キリスト教の聖人と自らの名前を合わせ「サンクト・ペテルブルグ」というドイツ語名をつけた。ドイツには今でも「ブルグ」：：城・堡の意、とつく都市名が多い。その後一七六四年ここにはエカテリーナ二世の離宮として、今のエルミタージュ美術館、隣接する冬の宮殿も建てられた。現在は美術館の所蔵する膨大な古美術品が観光の呼び物となっている。武揚はロシヤ皇帝に招かれて、何度も華やかなここでの社交の場に列席した。(宮廷での様子は研究会誌四三三六頁に武揚の手紙から引用して書いたもので御参照ください)

時が過ぎてこの都市は一九一四年にはペテログラードと改められ、また一九二四年共産党支配のソビエト連邦となって更にレニングラードと改称された。その後ソ連が崩壊して国名は昔のようにロシヤとなり、ここも元の「サンクト・ペテルブルグ」に戻った。

ところで武揚がロシヤ公使となる少し前、明治四年に伊藤博文、大久保利通、木戸孝允らが岩倉使節団に加わり、米欧十二ヶ国視察の旅



防寒服姿の榎本武揚（ペテルブルグで撮影）

に出た。その時随行した史家により『米欧回覧実記』全五冊が残された。それを見るとサント・ペテルブルグは漢字で聖彼得堡と出ている。聖はサント（セント）、彼得はペテル、堡：：とりでとなる。

しかし他の宛字辞典にはその他に数種の漢字の表記があり、銀勃爾觚、波連爾堡、伯多運動爾態、等々。これらは皆ペテルブルグの漢字の宛て字で、今の私達が知恵を絞っても到底読めないような字が並ぶ。當時は何の規制もなかったらしい。国名、都市名は勿論のこと河川の名、民族名まで漢字で書かれると、ルビがあっても読みにくい。

樺太、千島交換条約

榎本がロシアに派遣された主目的は、今迄の原住民、ロシア人、日本人等雑居のまま放任されていた樺太の帰属をロシア政府との交渉に

より決定するためであった。この問題については明治五年以来外務卿の副島とロシア代理公使のビュツツオフとの間で下交渉が進められていた。副島はロシアが明治四年、アラスカをアメリカへ売却した事もあり、北緯五十度以南の地を日本へ売却を提案したが六年になってロシア側は罪人流刑地として必要だとして樺太譲渡を拒否した。その後樺太ではロシア人の暴行が続き、漁場を荒されたりして我が国の移民も数が減少し、残りの五百数十人も北海道へ移転させる事が決定していた。榎本がロシアと談判をする頃は、わが国は一応樺太を事実上放棄する形になっていた。ロシア側では当時バルカン情勢が逼迫し、中央アジアでは英国との間でも危機的な問題があり、ロシアは解決策を急いでいた。バルカンはロシアの火薬庫といわれていたのである。

榎本としては日本政府の腹積りは承知の上での懸け引きが始まる。ロシアは相変わらず樺太全島領有を望み、日本は境界設定を基礎としていて、自分は外に何らの訓令も受けていない。ととぼけてみせた。ロシアの外務省アジア局長スツレモフとの会談は何回も行われた。当時ロシアの樺太に対する代物とは、ウルツプ外一、二の島であって、これでは樺太の代物としては釣り合わない。榎本は会談がまとまらないのはロシアの主張が日本の意に反しているからだと応答した。先ず代物について、ロシアのいうウルツプ島だけではとても問題にならない。榎本の意見として

一、千島の内ウルツプ島及びその付近の三島を永久に日本の領土とする事。

一、ロシア軍艦を日本に譲渡する事（軍艦の事は榎本の爆弾要求）以上の二つを要求した。

その後一月十二日にスツレモーフは日本公使館に榎本を尋ねて、軍艦は譲れない事、その他を回答し三月四日の会談で榎本は初めて相当の代償があれば、樺太を放棄してもよい事を述べ、その代地として千島諸島の譲渡を要求した。難色を示したロシアも遂に応じ結着した。

これについては日本政府において反対もなく、四月十七日寺島外務卿から承諾の旨電報が入り、榎本公使とロシア外務大臣の間で調印され、八月になり東京で同条約の批准交換が行われた。こうして幕末以来日本とロシア間で懸案となっていた樺太帰属問題は日本が樺太を譲る代わりに千島列島を得る事でケリがついた。

しかし社会的には決して喜ばれなかった。国民は政府の弱腰を責め、ロシアに対して横暴を非難した。榎本は家族からの手紙で日本国内での世論が伝えられると、却って外務省からは賞められたと、家族を慰めていたのである。だがもし樺太を日本が強く領有を主張する時は、戦争するしか手段はなく、明治の初期大国ロシアを相手にその様な力があつたであらうか。榎本が国内で非難されていた頃、ロシアでは非常に優遇され、殊にアレキサンドル二世は榎本に好意を寄せられ、樺太、千島の交換条約も無事に済んだので、皇帝から神聖スタニスラフ一等勲章が榎本に贈られている。

明治八年十一月三日、日本公使館が出来あがつた。この日は奇しくも明治天皇の誕生日に当たり、ロシアの諸大臣を招いて祝宴をはった。天長節に皇帝の使節が日本の公使館へ祝賀のために来訪している。当時外国の君主の誕生日に使節が来るという事は、全くの異例であつたといわれる。この様な関係にあつたから、榎本は度々宮廷の舞踏会にも招かれ、この様子は逐一妻への便りに記されていた。

マリヤ・ルース号事件

明治五年（一八七二）当時横浜に着岸していたペルー船マリヤ・ルース号から中国人の苦力：：クリー：：が逃亡し、虐待の事実が明らかになった。しかもこの苦力は奴隷として売られた者である事が発覚し、このために神奈川県に臨時法廷を開き、ペルー船を抑留し船長を取り調べた。その結果苦力全員の釈放を決定したが、ペルー政府がこれに抗議し八年六月国際裁判所にこの問題を提出し、明治政府へ賠償金を請求した。この時ロシア皇帝アレキサンドル二世は裁判長となって仲裁し、日本を勝訴にした。この事はロシアが樺太南半分を得たことに対する謝礼の意味もあつたといわれている。

武揚の手紙から

武揚がロシア公使となつてから三年めになった。懸案であつた千島樺太交換条約と「マリヤ・ルース」号事件も済み自分の仕事は今迄よりも大部閑散となつた。只時々外務省から申し越される件につき、談判をし、当地で手に入る外国語新聞を摘訳して、欧州の現状と共に報告をする。又送られてきた日本新聞に目を通し、国内情勢にも常に留意していた。それらの新聞は東京日々新聞、報知新聞、朝野新聞、曙新聞の四種で、当時の主な新聞である事が分かる。但東京日々はさすがに福地（福地桜痴）の筆だけあつて面白いと褒めているが、他はくだらぬ紙面ふさぎだと手きびしい。武揚も主たる大仕事が片付いて心にゆとりが出来、当地も丸三年になるので明年は帰国したいと寺島外務大臣に申し出た。加えてオランダから顧問としてロシアに来ていたポンペ氏も、この年八月には帰国したいとの事であつた。（私個人的な意見であるが、ポンペ医師のロシアから帰国後の晩年は薄幸な人生

であったと聞く。この人こそ長崎以来日本および日本人の爲めに尽した人であった。いずれの日か調べてみたいと思っている。

武揚はロシアとトルコの戦争のため、念願の帰国は少々おくれ、明治十一年七月シベリヤを経由して帰国した。のち出版された「シベリヤ日記」は彼の死後発見されたものである。

この手紙の終りの追白を見てみよう。

追白（追申のこと）

*ゼルマン、ゲルマン：ドイツ

当国へもし新公使を遣わされ候には、海軍少将以上の者を良とす。そして仏語に達者なるを以つて最も要とす。やむを得ざれば日耳曼（ゼルマン）英吉利（イギリス）語のいずれか話せ候者ならでは、その人大いに不都合あるべし。「コールト」並に「ジプロマチスト」上の付き合いは、いずれも仏語なれど「ゼルマン」語も世間一般通用せり。英語は上等社会の人物中、やや了解する者あるのみにて、其の数多からず。他の語は一切通ぜず、ロシアの皇帝始め皇族、諸親王方に至つては仏、日（ゼルマン）英語等に通ぜざる者なし。

九年四月末

寺島宗則殿

在魯

親展

榎本武揚

榎本はロシアを去るに当たり、後任者の条件を外務卿へ書き送っている。条件に合う人はこの時代大変むずかしかったのではなからうか。ロシア皇帝には親しく好誼を以つて迎えられ、帰途のシベリヤでも行

く先々で政府の指示により、ゆき届いた扱いを受けた。シベリヤの各地で事細かに地勢、産業、文化等を調べあげ日記に残した。情報活動にも等しい調査程度の内要でも、敢てロシア政府の協力を得たのは、人との意志の疎通が自由にできた武揚の語学力と人柄によるものである。シベリヤで一番の敵は毎晩人を襲う南京虫だったと伝えている。榎本自身はオランダ語と英語は同じように読み書きできると、家族への手紙には書かれている。ドイツ語はオランダ語と似ているので、何とか意は通じたと赤松則良の日記には出ている。フランス語は公用語として使われていたし、留学中にも勉強していた。武揚は在魯中から妻にフランス語の会話の勉強を勧めていて、明治十五年、中国公使として北京へ家族同伴で赴いた時、妻たづは外交官夫人として立派に勤めを果たした。

【参考文献】

『榎本武揚』

加茂儀一著

中央公論社

『米欧回覧実記』

岩波文庫

『文藝春秋』十二月増刊号人物事典

文藝春秋社

『シベリヤ日記』

榎本武揚著

講談社学術文庫

武揚が出した「家族への手紙」より

（いとう えいこ・古文書研究家）

名著『伊能忠敬』——その時代と人脈（四）

前田 幸子

『伊能忠敬』の構成とその特徴

大著『伊能忠敬』は、どのような内容がどのような分量で記述されているであろうか。その構成の比率を左記の表にまとめてみた。全七六六頁のうち第一篇「忠敬の閨歴」が二三八頁（三二％）、第二篇「忠敬測地事蹟」が四〇八頁（五三％）、第三篇「師友門弟」が二二〇頁（二六％）となっている。つまり測量に関する記述が全体の半分以上を占め、残りが忠敬と周辺人物の伝記である。特に第二篇の第二章「忠敬所用の測量法」は伊能の測量方法と使用した機器類の解説であるが、この章だけで一九二頁（二五％）と全体の四分の一、単行本一冊分もある分量をあてて緻密な考察を加えている。そこがこの本の際立った特徴であり、その出自・家柄を反映していると評されるところである。

『伊能忠敬』の構成			
篇	区 分	頁 数	
第1篇 忠敬の閨歴	第1～4章 三治郎時代～江戸修養時代	45	238 (31%)
	第5章 日本測量時代	125	
	第6・7章 晩年～秘喪時代	26	
	第8章 余録	41	
第2篇 測地事蹟	第1章 知識の程度	14	408 (53%)
	第2章 測量法・機器	192 (25%)	
	第3章 材料・製図方法	55	
	第4章 測定の精度	74	
	第5章 実用・書用	18	
	第6・7章 地図・著書	38	
	第8章 蔵書	12	
	1 麻田安彰	21	
第3篇 師友門弟	2 高橋至時	27	120 (16%)
	3 間 重富	27	
	4～29 その他 約40名	46	
	合 計	766	

「秤座」について

では、大谷の生家「秤座」とは、どのようなものだったのだろうか。

「秤座」とは、江戸幕府の特別許可を得て、秤の製造、頒布、検定、修繕などを独占した座である。その起源は室町時代であり、関東は守随家、関西は神家にまかされていたが、大谷家はその神家の出店すなわち西国三三力国の一つ、播磨国「秤座」姫路出張所であった。

度量衡は言うまでもなく国の経済の大本であり、これを統一することが天下統一の一つの要であったことは、秦の始皇帝や豊臣秀吉の例をみても明らかのように、権力の基本であったといえよう。したがって、度量衡を掌る「秤座」の権限は絶大なものであった。秤座が行う「秤改め」（検定）を通じていない秤を使うことは「法度」であり、もし規定に合わない秤を製造した場合は「死罪」にもあたるという苛烈なものであった。しかも検定は秤ひとつにつき検定料が銀一分という高額なものであったから、秤の検定を免れようとする例があつたとたんかったということであるが、秤座が得る収入は莫大なものであった。

しかも、秤改めの際には、地方秤座は商人であるにもかかわらず、「十万石の格式」を持って臨んだということである。「十万石の格式」とは、どのくらいのものであるか。そもそも大名とは一万石以上をいい、五万石以下を小大名、十万石から上を大名というとのこと。「十万石」は大名の格式という意味であるようだ。手元にある『大名の日本地図』という本によると、一〇万石の石高をもつ藩は弘前藩、宇和島藩などである。そもそも大谷家の地元である姫路藩の藩主池田侯の石高が十五万石であるから、大谷家の格式の高さは商人としては破格なものであったと想像される。このことをあらわす資料がある。

四日市にある「秤の館」の小林健蔵館長が『おかやま下之町ものがたり』というたいへん面白い資料を送ってくださった。岡山にあった秤

座・大谷家の様子が書かれている。(備前岡山の秤座もまた大谷姓であった) 少々長いが、ここに引用する。

【秤の大谷・榎の吉田】 『おかやま下之町ものがたり』より

戦前まであった明治生命の北隣り(いまの天満屋の前)に江戸期の元禄時代から続いていた大谷という秤屋があった。この家は徳川幕府から秤(度量衡)の製造販売を許されていた京都の神善四郎の一族で、下之町に店を出してから、とても威張った商人であったという。

客が秤を買いに来ると、奥から出てきた主人はまず、「どうーれ」と横柄に武士言葉で答える。そしておもむろに秤を袱紗にのせて、玄関(店先)に立ったまま秤を客に差し出す。すると客は平身低頭して、銭をその袱紗に置いて引き下がるという、いまして思えば、商人としては本末転倒のような商売人である。

それに一年に一度ある秤改め(ちぎ、あらため)がこれまた大変な検査である。京都から上席の番頭が来るのだが、京橋下に船が着くと、御朱印(幕府の免許状)と元木(基準竿)に元銅(分銅)などを入れた白木の箱に注連縄を張り、それを三十人ばかりの人手が担いで、前触れ、後供のお供とともに、いかめしい行列をつくって下之町の大谷の店先に到着するや、土足のまま座敷に上がって担いで来た白木の箱を床に備えて据える。

そうして大谷の店は、表に葵の紋の幕が張られるという大仰さ。下之町の人は誰一人近寄る者はいないし、おろん通行人もこの日はない。また下之町の本陣に泊っている大名などもこの日はうるさいとばかり、裏口から脇本陣などに宿替えをしたそうである。

そしていよいよ秤の検査の日になると、あちこちから持参した秤はほとんどが不合格、役人から新しい秤を買えといわんばかり。しかし、この日はかりは大谷には関係なし。この日売れた秤の売上げ代金は全部役人の懐に収まるという仕組み。幕藩時代とはいえ、大変な検査もあったものだ。(以下略)」

姫路の大谷家・岡山の大谷家

この資料で特権的町人としての秤座の威勢を伺い知ることができ。『秤座』の著者・林英夫は昭和四〇年代、この岡山の大谷家をはじめ各地の旧秤座を訪ねて調査した。その結果の感想として「当時の地方秤座は、秤の利益幅が高く、秤改めの利潤と相まって家計は裕福で、経済的余裕があったために、和歌・俳句をたしなみ、西洋流砲術を学ぶ開明性をも持っていた。これは、私が旧地方秤座のかたがたをお訪ねした全体の印象としても感じられるところであった。」と言う。林は姫路の大谷家は訪ねていないが、姫路の秤座も同じような境遇であったと考えられるので、亮吉の生育環境を推測する手がかりとすることができであろう。



御用旗(神家蔵)
「使用例は不明だが、おそらく秤改めのさいに使ったのであろう。」
林英夫著『秤座』



測量方・御用旗
(伊能忠敬記念館蔵)



高張提灯(複製) 秤の館蔵

『秤座』 林英夫著より（分銅の写真とも）

間には縁戚関係はないとのである。専門家のなかには、現在は関係がなくても、江戸時代には何らかの関係があつたのではないかと見る向きもあるようだが、今の段階ではその根拠は見つかっていない。

さて、問題は、このような境遇に恵まれた、そして東大物理学科を首席で卒業して洋々たる前途が開けていたはずの大谷が、三十三歳から四十二歳というまさに人生の最も大事な時期を「伊能忠敬」という専門から外れた研究に打ち込んだのはなぜであろうか。橋本万平は「今までの経歴と全く異なったこの大きな仕事を引き受けた大谷の心境や事情は、明治三十六年頃から四十一年までの大谷の動静と共にはっきりわからない。」と記している。亮吉二十八歳から三十三歳の期間についての資料は乏しいようだ。そのようななか、インターネットの「YAHOO!百科事典」の「大谷亮吉」の項に「病身のためとくに職につ

かず、学士院嘱託として研究を行った」とあるのを見つけた。大谷は病氣だったのだろうか。執筆者である中央大学名誉教授・菊池俊彦先生に問い合わせてみた。しかし残念なことに調査後相応の年月が経過しているため、「病身」であつたという記述がどのような資料に拠つたものかはいずれ出せないとのことであつた。一方、橋本は「長岡半太郎の日記等を丹念に調べると何か手掛かりが得られるかもしれない」と書いている。その提言に従い、国立科学博物館新宿分館を訪ねて、保管されている長岡半太郎の日記を閲覧させてもらうこととした。

長岡半太郎の日記

長岡の日記というのは、実際は小さな手帳に書かれた断片的なメモの集積であつた。手帳は年月を経て傷みが甚だしく、今後は公開しない予定とのこと。最後かもしれない閲覧者となることができたのは幸運だった。しかし、長岡の字はごま粒のように小さく、しかも崩し字で大変読みにくいものであつた。十数冊もある手帳を一日がかりで調べたが、大谷亮吉と調査委嘱の関連を示す記述は、残念ながら見出すことができなかった。大谷に関して辛うじて見つけることができたのは、「嘱託員大谷亮吉指図方法等を攻めめる」云々の文言と、大谷に支払うべき報酬の予算額「大谷嘱託員 初年、次年、四八〇円」というメモであつた。ちなみに四八〇円という額は、その当時の師範学校教員俸給表（五段階）でみると、上から二番目と三番目の間である。大谷家は資産家であつたから、この報酬にさほどの関心をもつたとは思えないが、気になるのは「大谷嘱託員」という呼び方のよそよそしさである。大谷と長岡は師弟関係にあつたが、どの程度の親しさであつたのか。長岡は、なぜ大谷に伊能忠敬の調査を依頼したのか。「大

谷に白羽の矢を立てたのは正解であつた」と橋本は記している。しかし、果たして本当に長岡が大谷に白羽の矢を立てたのだろうか。それも含めて大谷に委嘱した経緯はまだ明確にはなっていないはずだ。もし白羽の矢を立てたとして、大谷はなぜそれを引き受けたのか。

大谷亮吉の情熱の淵源

いや事実は逆で、実は大谷自身がこの役を買って出たのではないだろうか。調査を進めるうち、そのような疑念が湧いてきた。なぜなら、単なる頼まれ仕事にあのように精魂こめた仕事は九年間にもわたつてできるはずがないと思えるからである。あれほどの情熱は大谷自身の内部から湧きだしたものにちがいない。大谷の執筆の関心はあくからかに第二篇第二章「測量法・機器」の部分にあるが、それは生家が秤座だったというだけではなく、もっと強い動機に由来するように思われる。長岡半太郎が『伊能忠敬』を刊行するについては、祖父の顕彰という個人的事情が動機のひとつとなっている。大谷も何かそのような事情——内心の希求があつたのではないだろうか。視点を変えて『伊能忠敬』を精読すると、今まで何気なく読み過ごしていた記述が特別の意味を訴えているように思えてきた。そして、一つの仮説にたどり着いた。「大谷亮吉も自分の先祖が伊能測量に重要な関係をもっているのでは」という期待で伊能忠敬の事績調査に従事したのではないかと、ということである。その根拠は、①伊能忠敬の後継者は大谷貞四郎供隆だとする説があること ②岡山滞在中に弥右衛門という人物が入門したこと ③岡山大谷家の当主に大谷弥右衛門という人物がいることの三点である。いささか粗雑で大胆な仮説かもしれないが、可能性がないともいいきれないと思う。以下で筆者の見解を詳述したい。

大谷貞四郎供隆という人物

まず初めに注目したいのは『伊能忠敬』三三頁以下に「大谷貞四郎供隆」なる人物が登場していることである。この項は伊能忠敬の量地上の素養について述べている部分であるが、大谷は記述が完了したあとに「茲に忠敬の量地上の素養に関して一言すべきことあり。」とわざわざことわって『規矩術傳來之巻』という書物を紹介している。

この本は日本における測量術の伝来の系譜を表わした小冊子であるが、伊能勘解由の次に「大谷貞四郎・平供隆」という人物が記載されており、伊能忠敬の測量術の後継者は「大谷貞四郎供隆」だというのである。大谷貞四郎供隆がどのような人物かについては一切説明がないので不明である。しかし、まずはこの人物が大谷姓であることに注目したい。大谷亮吉はいったんこの系譜を紹介したうえで、この系譜はまったく信用できないと非難している。その理由は、伊能勘解由の条に「筑前福岡で測量隊が測量器具をかたに借金をした」という注がついているが、『測量日記』にそのような記述はないし、伊能測量隊がお金を借りるわけがないから、この系譜図は疑わしい、というのである。この論理の正否はともかくとして、疑問に思うのは、それほど信用で

きない書物なら、なぜわざわざ掲載したのかということである。

いったい、『伊能忠敬』にはこのような整合性のない記述や、何かに苛立っているような記述がまま見受けられる。そのたびに思うのは、この本が「大谷が草稿を作り長岡が朱批を入れた」ものだということである。長岡半太郎の検閲を経たことを、常に念頭に置いておかなければならないと思う。この三三頁以下に關していえば、『規矩術傳來之巻』所載の「伊能測量術の系譜」、そこに記された「大谷貞四郎供隆」の名。実は、これこそが大谷が世に示したかったことなのではないだろうか。しかし長岡の朱批が入った結果、掲載はしたものの全く否定的な扱いになってしまった、と解釈するのは穿ち過ぎであらうか。

伊能測量を継ぐ者

『規矩術傳來之巻』では大谷貞四郎であるとされている伊能測量の後継者。しかし一般的には伊能測量の後継者は渡辺慎すなわち伊能測量隊の隊員として忠敬を支えつづけた尾形啓次郎の名があがるだろう。忠敬は、自分の測量術を後世に伝えるために、その概略を書物に書き残すことを命じ、尾形は『伊能東河先生流量地伝習録』をまとめた。

『規矩術傳來之巻』に記せる伝来系統（大谷本）

『規矩術傳來之巻』（部分）（東京大学図書館蔵）

一術起漢土—爲阿蘭陀流—樋口權右衛門尉—金澤刑部左衛門尉—金澤清左衛門尉—
金澤勘右衛門尉—清水太右衛門尉—貞徳—河原吉兵衛尉貞頼—早川源五左衛門尉尚徳—
野間權左衛門尉政令—村井蘇道子昌弘—萬尾六兵衛時春—松宮寛山俊仍—伊能勘
解由—大谷貞四郎供隆—鈴木多門光英—村田佐十郎光隆—村田佐十郎光恒—奥邦喜
三郎増地—渡邊儀右衛門以親
(地)

伊能勘解由
下総国佐原任寛政十二庚申日本測量經緯度有
實測書 筑前福岡至御城下金糸子為海備磁石入
大平器 太守と並上右測器以親淨見ス
大谷貞四郎
平供隆

その序文によれば、忠敬は次のように命じたという。「天文曆学にはそれぞれ立派な後継者がいる。しかし地理の術においては、まだいない。もし後世に私の術を志す人があれば、詳しく伝えてやってほしい」と。実際、『量地伝習録』は土地の計測方法だけが簡単に記載してある。尾形は普請役として多忙であり、僅かな余暇を使ってまとめざるをえなかったという事情でこのような簡潔な書物になったものと察せられる。しかし、量地の術はこれで後世に伝わるとしても、測天の術のほうは、後世に伝えることができるのであろうか。伊能測量の優れた点は、土地の計測の他に、測天の術を取り入れたからである。測天の術も後世に残さなければ、車の両輪とはいえない。「天文曆学には各其家あり」と言っても、天文曆学一般と測量の実務で使う測天術は全く同一ではないだろう。伊能測量で培ったノウハウがあったはずである。それをいっただれが引き継いだというのか。以下はその問いに対する一つの推論である。

備中岡山での滞在

忠敬は第五次測量時の文化二年（一八〇五）十二月一日から翌三年正月十八日までの一カ月半の間、岡山に長期滞在した。その間の事情は大谷本の一〇二頁以下に詳述されているが、江戸に増員を願ひ出て、それが許可され江戸から隊員が到着するまでの間、岡山城下の下之町・脇本陣福岡屋吉郎平衛方に滞在して下図作成や天測などを行っていた。忠敬はここで昼夜観測を行い、木星交食の観測もとと測量日記にある。下之町での天測については四三七頁に緯度測定のものにも記述があるが、他の土地におけると同様、岡山でも地元の向学の者に対して、天体観測の見学指導等をしたことであろう。岡山の秤座・大谷家も下

之町にあったから、同じ町内に滞在した伊能測量隊の天測を見学に行ったことは充分に考えられる。ちなみに四五頁でふれたが、安政元年（一八五四）当時の岡山の秤座の主人は「大谷弥右衛門」である。

岡山の弥右衛門、浅五郎、紹右衛門

岡山に長期滞在していた忠敬一行は、江戸に申請した増員要求がなかなか受け入れられないのにしびれをきらし、隊員の現地採用にふみきった。『測量日記』一月二十日の条に三名の者が入門したことが記されている。二十日より岡山の弥右衛門、浅五郎、紹右衛門、三人随分なり」とある。この後、浅五郎と紹右衛門は測量を手伝って測量隊と行動をとにし、二月二十日に帰国したところまで記録されている。問題は「岡山の弥右衛門」である。一月二十日に名前がでてきたきり、その後は全く名前が出てこないのである。弥右衛門は入門したものの、測量には従事しなかったようだ。では、何のために入門したのか。このあたりの事情については何の手がかりもないが、もしこの「岡山の弥右衛門」が、秤座の大谷弥右衛門であったとしたら、何となく謎がとけそうな気がするのである。しかし、今回は紙面が尽きた。なお平松紹右衛門と窪田浅五郎であるが、それぞれ地元の篤志家が開設しているホームページに資料があり、平松が測量当時使用していた彎窠羅針なども紹介されているのでご覧になっていただきたい。

つづく

（まえだ こうこう・地方公務員）

【参考資料】

『秤座』

林英夫著

吉川弘文館

『おかやま下之町ものがたり』

（協）岡山下之町商店会



伊能塾

第五回例会（四月十八日実施）再録①

○講演一「伊能図とともに深化する私の雑学」講師・大沼晃さん

はじめに 先般開催された横浜フロア展の際に星埜代表が「静岡には昔、広沼という沼があった」と言われたのがきっかけとなつて、伊能図と現在の地形の関係などについていろいろ調べ始めました。その成果を会報五七号、五八号、五九号でご紹介しましたが、その後さらに調べましたので本日報告したいと思います。

①駿河国「広沼・浮島が原」（会報五七号、五八号関連記事参照）

「天も地もまだ固まりきらないで、両方とも、ただ油を浮かんだように、ところどころになって、くらげのように、ふわりふわりと浮かんでおりました。その中へ、ちようどあしの芽がはえ出るように二人の神様が生れました。」（古事記物語Ⅱ鈴木三重吉著より）

『古事記』に記述されているように、「葦原中国」とは沼が点在した国土のことで、昔の日本にはこのような沼地に葦が生えているような場所がたくさんあったと考えられます。日本の原始風景ということができるでしょう。広沼の北西には田貫湖（沼）^{たぬき}というのがあります。

ここはいわゆる「ダイヤモンド富士」の名所で、潤井川^{うるいかわ}の上流で写真家のメツカとなつております。愛鷹山の南裾から流れ落ちる赤淵川や須津川があるJR東田子の浦駅と吉原駅の間あたりが、かつての広沼だったところです。

五七号所載の浮世絵「大野新田から見た富士」と「原から見た広沼と富士」の絵をご覧ください。牛が背負っているのが葦ですが、当時

はこれをどうしたのでしょうか？答えは住宅の屋根に利用したのです。「茅葺き」も「わら葺き」も中に葦を入れて丈夫さを保っていました。

現在の浮島ヶ原自然公園の説明板に「昭和初期には胸までつかつて田植えをしていた」と書いてあります。「オオアシ」という田下駄も使っていたようです。私は戦時中福島に疎開していましたが、そのような田植えは見たことがありません。しかし伊能測量隊が見た広沼の農作業風景は、きっとそのようなものであったと思われます。

ところで皆さんはアシとヨシの違いをご存じですか。アシとヨシは、じつは同じものです。つまり「吉原」の語源は「ヨシ原」で、葦（アシ）は悪しに通じるので、良し（ヨシ）と呼ぶようにしたようで、アシが生えている原っぱという意味です。この地名は現在のは地図上に「元吉原中」、「吉原」、「本吉原」という地名で残っております。また吉原の宿場町が風水害で流されて上の方に新しい町を作りましたが、それが「新吉原」という地名に表われています。

ちなみに、浮島ヶ原自然公園は東田子浦の駅から徒歩一〇分以内のところにありますが、セイタカアワダチソウが繁茂していて、見るかげもない残念な状態となっております。

②相模国 吉田新田と横浜（会報五八号関連記事、吉田新田・開港図参照）

吉田新田は現在の横浜市中区から南区に跨る地域で開墾された新田で、主に農業を営んでいましたが、半農半漁民もいました。現在の横浜ランドマークタワーは内海の中だったようです。

「安政六年（一八五九）に開港される前、武州久良岐郡の横浜村とその北東、江戸湾よりの埋めた地である横浜新田との戸数は、あわせてもわずか一〇一戸しかなかった。開港ときまるや幕府は

この寒村に九万六〇〇〇両もの巨費を投じ、昼夜兼行でふたつの
棧橋と港町を造成させた。村の北と南を流れて江戸湾に注ぐ中村
川とを、あらたに堀削した堀川で連結。海に面してコの字型に画
された関内の地を長崎の出島になぞらえ、その中央の駒形の地に
運上所（税関）をもうけたのだ。」

―軍艦「甲鉄」始末 中村彰彦著より引用―

（注）一八五〇～一八六五年間の一五年間平均で金一両＝銭六五

〇〇文。四文＝一〇〇円がひとつの目安、金一両＝一六万円

九万六〇〇〇両×一六万円＝一五三億六〇〇〇万円

立派な公共事業だったのではないだろうか。

③国際貿易港・浦賀と咸臨丸（会報五八号関連記事、観光マップ 参照）

慶長五年（一六〇〇）、豊後にオランダ船リーフデ号が漂着し
ました。家康は、航海士ヤン・ヨーステン、水先案内人ウィリア
ム・アダムスを外交・貿易の顧問にし、東南アジア諸国と朱印船
貿易を行うことにしました。慶長九年（寛永十二年（一六三五）
の三一年間に三五六隻が出入港しました。浦賀には一七二〇年に
浦賀奉行所が置かれ幕府は砲台を整備しました。以後江戸湾に入
港する船は必ず寄港する要衝となり、浦賀は長崎の出島以上の国
際貿易港になりました。浦賀港の観光マップをご覧ください。当
時西浦賀と東浦賀を結ぶ渡し船がありましたが、これは実は今も
あり、石谷春香さんの「伊能忠敬研究」の論文にも登場します。
伊能隊は西浦賀で宿泊しましたが、西浦賀には舟の往来安全の
ための燈明堂がありました。燈明堂は近年土台が見つかり、これ
を復元して観光資源として売り出しています。伊能測量隊も見た

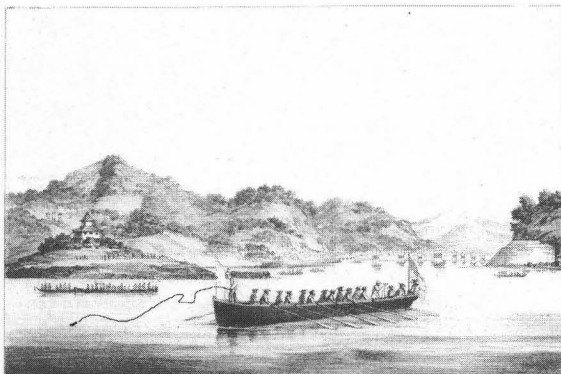
であろう燈明堂は、どんなものだったでしょう。当時の燈明堂は
『ペリー艦隊日本遠征記』の挿絵に載っているようなものだった
と思われる。ちなみにこの本には「日本の船の方が我々の船（カ
ッター）複数の人間がオールで漕ぐ大型ボート）よりうまく出来
ている。我々の船は風雨が強いときはズブ濡れになるが、日本の
船は後ろで櫓でこぐから濡れない。」「何と緑豊かな美しい国か。
特に富士山を背にした湊の景色は筆舌に尽くしがたい」というよ
うなことが書いてあります。

彼らがウェブスター島と名付けた夏島は、現在は日産等の工業団地と
なっています。伊能図とペリー艦隊の測量図（水深）との比較ができ
ます。『ペリー艦隊日本遠征記』
の挿絵をご覧ください。

【補足説明】

（渡辺）当時、浦賀には船番
所があったが、地形的にとて
も番などできる場所ではない。
おそらく外国船は自由に通り
抜けられたらう。

（鈴木）この図はカッターの
船首から錘を投げて水深を測
っているところです。船が錘
の直上に来たと思われる時の
縄目をはかります。これは軍
艦が座礁しないように湾に入
る前に水深を調べているので
す。



燈明堂とカッター船『ペリー艦隊日本遠征記』より

さて咸臨丸についてお話しします。勝海舟は安政七年(一八六〇)、咸臨丸で浦賀から出航しました。本年は三月十七日をもって勝海舟の渡海から一五〇年目に当たるというタイミングです。咸臨丸はオランダで建造され「ヤパン号」として長崎まで回航されてきました。スクリー式蒸気軍艦で一〇〇馬力、推定排水量三〇〇トン、全長五〇mです。艦名は「上の知遇に感じて、よく下のものにのぞむ」という意味で、出典は『易経』です。

咸臨丸の航海長をつとめた小野友五郎という人物について、存じでしょうか。この人は明治時代、工部省で活躍した人で鉄道の路線測量、製塩業、算数教育にあたりました。

「別名・小野広胖(一八一七〜一八九八) 幕末・明治の数学者、政治家。もと常陸笠間藩士。のち幕臣。通称友五郎。明治以降はこの通称を本命とした。和算家としては広絆の名で、洋算家としては友五郎の名で知られている。(略)」

幕府が長崎に海軍伝習所を設けたとき、友五郎も派遣されて、二ヶ月間蘭人から航海術・洋算などを学んだ。つづいて同年幕府が軍艦教授所(のちに軍艦操練所)を開設したとき、その教授となり、万延元年(一八六〇)咸臨丸アメリカ派遣の際はこの乗組、航海測量を担当した。その他、江戸湾砲台建設の取調べ、小笠原諸島の測量、横須賀造船所設置の建議など、幕末における活躍は著しい。(略)

江戸時代に発展した日本独自の数学(和算)は、幾何学の分野においては、西洋に劣らぬ発展を見せたが、実用の学問とは言いがたかった。しかし和算を修めた人々は西洋数学や科学・技術に触れたとき、恐ろしいほど理解力と吸収力を発揮した。そういった人々は、単に技術屋でとどまらず、技術を生かしたテクノクラ

ート(技術官僚)に変貌していった。」

—軍艦「甲鉄」始末 中村彰彦著より引用—

④近江国 安土周辺の干拓事業(添付資料;琵琶湖干拓史)

「安土城の北に広がる琵琶湖は、この時代にはまだ淡水(おうみ)、近江の海などと呼ばれ、カイツブリ(鳩Ⅱにお)が無数に集まって鳩の浮き巣を作っていることから鳩の海とも言われる。(途中略) 満々たる湖水は落日を照り返す金波銀波の縮緬皺におおい尽くされ、かなたの竹生島、竹島、奥島などは逆光になって影絵のようにしか見えない」

—山本謙一著「火天の城」より引用—

この付近について、伊能図には「大浦葭(あし・よし)」と表記しており、まだ葭が生い茂る沼地であったようです。干拓図を見ると意外と年代(大正・昭和初期)が新しい事業であることがわかります。琵琶湖の特別絵図は諸侯に配るため二、三回測って作りました。

(渡辺) 琵琶湖図を作ろうという案が前からあったのでアシの間に分け入って測ったが、精度が出ないので帰り途に測り直した。道路を測って確認した。苦勞して作った割には使われていない。東日本の沿海地図小図のほうが好評で十数枚残っている。浜名湖や松島の図も作ったという記録はあるが、残っていない。諸侯にも配っていない。まあ、おもちゃだね。

⑤国境の島 対馬

「対馬」の名前の由来については二つの説があります。

①馬韓(紀元前二世紀末〜四世紀中葉半島の南部西方五〇ヶ国、

後の百済)の対角線上にあるから「対馬」となった、という説。
※辰韓(東方十二ヶ国、後の新羅) 弁韓(十二ヶ国、後の任那)
②韓国から見ると二つの島のように見えるから、という説。

対馬は一つの島か、二つの島かという問題があります。伊能図と近代図とを比較参照しながらお話しします。対馬のちょうど真ん中あたりに万関橋(久須保水道)があります。明治時代にここに軍事上の理由から運河を掘りました。以後、もともと一つの島であつた対馬は上島と下島にわかれたのです。

「天然の良港、浅茅湾(あそうわん)の中の竹敷に海軍要港部が設置されたのは明治二九年(一八九六)。海軍の目標は、東の久須保浦の海峡での運河の開削だった。もちろん、日露戦争を想定してのものである。明治三三年、竹敷の日本海軍要港部は、日露戦争を控え小型艦艇を通す水路として万関の丘を掘りきった。幅二五m、水深三m。海軍艦船の通り道として人工的に掘削した瀬戸は、軍事的に交通の要衝として重要視され、日露戦争や第一次大戦にも小型艦船の通り道だった。

万関橋の下を轟々と流れる万関瀬戸(久須保水道)は、もともとと地続きであつた。南北につながり、東西の幅は尾根部分で十数メートルしかなかった。ここは土ではなく、岩盤だったので、東西両側を土嚢を積んで潮止めし、ダイナマイト以外は人力で掘ったという。」

—フリー電子辞書より引用—
その工事を請負った会社は現在の大成建設ですが、軍事上の機密のためか開削に関する資料は現在皆無だということですよ。

その久須保水道より前に作られたのが別図の横須賀の新井掘割水路です。明治十九年着手し、明治三二年に完成開通しました。

古い歴史がある水路が意外に身近なところにあつたわけです。

次の資料は文化年間に幕府に上呈された「五街道分限絵図」です。五街道の付属道路として「江ノ島道」が作られました。箱根駅伝で有名な藤沢の遊行寺坂(別名・心臓破りの坂)から曲がる道です。伊能測量隊は鎌倉の鶴岡八幡宮の若宮大路を、神様に遠慮して間縄を使わず歩測で測ったそうです。(渡辺・熊野権現も歩測と磁石でした。)二の鳥居から三の鳥居までは「段かずら」の名称になっており、かずら石と呼ばれる神社仏閣の基礎石が使われつづられています。絵図では省略されています。

伊能隊が江ノ島で宿泊した「夷屋」について、現在も江ノ島で営業中の料理旅館「恵比寿屋」の専務にお話を伺いました。「恵比寿屋」は創業三五〇から四〇〇年、十三代目が市左衛門、十五、十六代目が茂八と名乗っていたそうです。(詳細は※頁参照)

(渡辺・藤沢在住の坂本会員の話では、江ノ島神社参道の旅籠は「岩本楼」が支配していた。「夷屋」は二軒あり、参道の右側が「夷屋吉右衛門」、左側が「夷屋茂八」。伊能隊が泊まったのは『測量日記』によれば「吉右衛門」のほうですね。)

【質疑応答】

(小林) (回覧されていた軟性プラスチック製の地図について) この立体地図は面白いですね。どこで売っていますか？

(大沼) これは山中湖村で買いました。富士山周辺地域の地形図で、値段は七〇〇〜八〇〇円位でした。今も売っていますかどうか。

(小林) 大沼の水源は富士山の伏流水ですか。

(大沼) 富士山の水ではなさそうです。

(了)



伊能塾

第五回例会（四月十八日実施）再録②

○講演「地図屋の伊能測量学」

講師・猪原紘太さん

はじめに まず自己紹介をさせていただきます。私は猪原と申しましてイノシシ年生まれです。伊能研究会の催しに参加するのは二回目です。一昨年の例会に初めて参加いたしました。勉強会は今回が初めてです。

（鈴木）先日、多摩の歴史講座「伊能忠敬測量隊の道を歩く」―聖蹟桜ヶ丘から武蔵の国一之宮・小野神社まで歩く会でご一緒しました。

（編集部）二〇〇八年一〇月、テレビの「タモリ倶楽部」（テーマ・地球サミット2008）にも出演されました。（会報五四号談話室参照）

出身は岡山県ですが、私が伊能図に興味を持ったのは私の出身地の七日市（岡山県井原市七日市町）の地名が伊能図に描かれており、「伊能忠敬の足跡」（銅像建立報告書）にも、宿泊した記録が残されていることを発見したからです。「七日市」は旧山陽道の宿場の一つで旧本陣の残っている「矢掛」と箱田良助（第七次測量から参加、榎本武揚の父）誕生の地である「神辺」の中間にある宿場です。

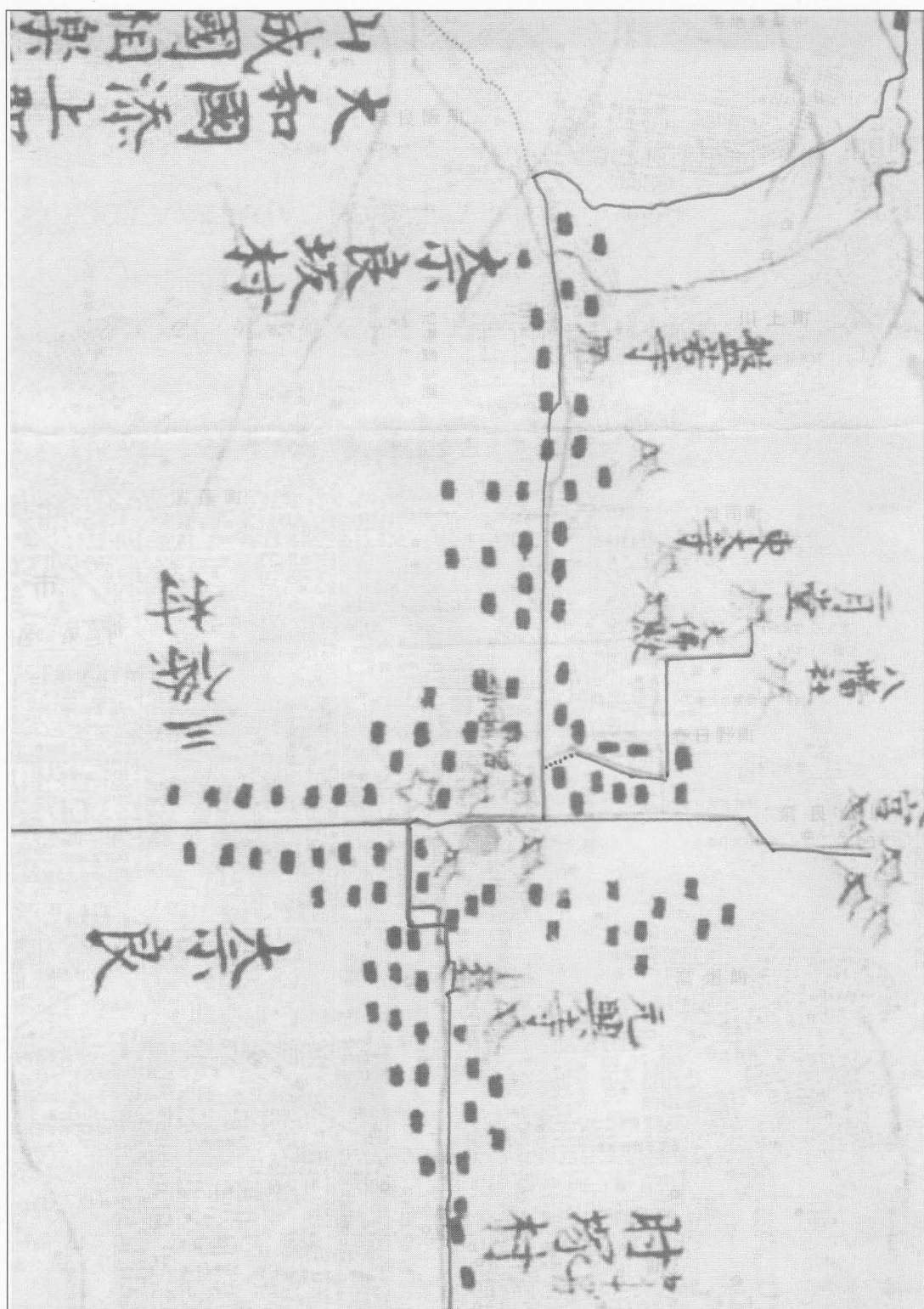
仕事は「地図屋」を四〇年やっております。学生時代に四年間地図の会社でアルバイトして、そのままその会社に就職し、地図の道に入りました。現在はその東京カートグラフィック株式会社という地図会社の代表取締役会長をしております。地図作りは、従来測量の技術や専門知識がなければできない仕事でしたが、現在は機器類が発達してデザイン会社でもパソコンを使って簡単に地図が描ける時代になりました。長年地図を作ってきた者として、地図の世界に何か足跡を残す仕事をしたいと考えております。

①最近の地図事情

近年、パソコンの普及とともにGIS（Geographic Information System）地理情報システム）が普及してきました。一般にGISは専門家が使うことが多く、価格も通常三〇万〜四〇万円が当たり前のソフトです。当社で開発・販売している「地図太郎」はこのGISを専門家でなくWordやExcelのように一般の人達に使って頂けるように、低価格・簡単操作をコンセプトに開発しました。基本機能に限定した「地図太郎（三、九八〇円）」と機能を追加した「地図太郎PLUS（二九、〇〇〇円）」があります。どちらも携帯やデジタルカメラの写真を地図上に貼り付けたり、

位置を記録するGPSロガーという道具を使って、旅行した記録（ルート）を地図上に残したりすることが簡単にできます。東京カートグラフィックのGISソフト「地図太郎」を使ってもらえば、GISの機能の素晴らしさが理解してもらえらると思います。印刷するなら縮尺指定して高画質で印刷できるので「地図太郎PLUS」のほうがいいと思います。





(渡辺)先日、立山の雪壁を見に行つて来た。アルペンルートの除雪作業は昔は路肩に標柱を立ててそれを目印にしていたが、堤在はGPSを使つていて、数メートルの誤差だと聞いたが。

その通りです。プロの測量屋が使うGPS(Global Positioning System)衛星を使つた全地球測位システムは数センチメートルの誤差です。

②伊能測量を現代地図でたどる

ここ数年、伊能測量の経路(測線)を調べて、それを地形図の上に乗落としていく作業をしております。東日本を大体終わつて西日本に入り、目下伊勢志摩の島の多い所で苦労しているところです。国土地理院のインターネット地図「ウオッチーズ」の二万五千分の一地図に伊能図をのせたものを作っております。それで本日は、伊能大図と「ウオッチーズ」を重ねた地図の「奈良」の部分を持つてまいりました。伊能測量隊の測線を現代の地図に重ねてみると大体びつたりと適合します。(前ページの伊能大図および二万五千分の一地図をご参照ください。)

伊能大図と「ウオッチーズ」を重ね合わせるには、GISソフト「地図太郎PLUS」を用いました。「地図太郎PLUS」のもつ画像の透過、拡大・縮小、回転、変形機能を駆使して重ね合わせを行いました。伊能忠敬は導線法及び交会法を用いて測量・図化しているので、当時の測量誤差や紙の伸縮誤差を斟酌した上、「地図太郎PLUS」の画像位置合わせ機能を用いて地形図に合わせながらデータ化を行っています。現在もそのほとんどの道路(街道)が残っていること、現在の海岸線が明治以降いかに多く埋め立てられているかがわかります。

(丁)

【伊能測量余話】

(渡辺)伊能測量の実際についての話をしましょう。まず幕府から本人への「命令書(御証文)」ですが、第八次測量のものが残っています。「先触れ」は自分で出すのです。それにお証文の写しをつけて村々に伝達されました。旅行が終わるとすぐ返却するので、現物は残っていませんが、「先触れの写し」が各地に多数残っています。

旅行中は明六ツ、夜明けとともに、その日の作業を始めました。夜明けに起きるんじゃないですよ。現場(作業開始場所)に着いていないといけないんです。そうじゃない日は、忠敬は一日中機嫌が悪かつたそうです。先手の出発は夜明け前なので高張提灯と手提提灯を持つて出ました。その前に食事、荷造り、人足集め(札を渡し役割分担は事前に決める)などの作業を、やらなければならぬのですから、かなり早く起きたと思います。夜中の時間はどうやって知ったのか。受け入れ側の村役人たちは、おそらく徹夜だったと思いますね。見送りに出る人はもっと大変でした。代官、奉行、藩士や大庄屋などが見送りに出ました。測量隊には駕籠が用意されていましたが、忠敬が測量中駕籠に乗ったかどうか、という点については何も書いていないのでわかりません。駕籠には二種類あつて、通常の駕籠と「青駄」という竹の簡単なものと二種類用意していたという記述があります。その日の測量を終えて宿に着くときに使われたようです。到着は早ければ正午、遅くても午後二時くらいでした。藩の役人、付き廻りの村役人、次の土地の村役人などが挨拶に来ました。宿の亭主が取次ぎ、忠敬が会う。他の隊員たちはその日のデータの整理をする。雨天以外の日は夜間に天体観測するための天測場所の整備の仕事もありました。ですから結構忙しかつたんですね。測量中はこれを毎日繰り返していたわけです。大変な労力でした。

(丁)

九州支部例会報告

三つの講演と「伊能中図」、そして感謝

石川 清 一

本年度の九州支部例会が五月二十九日(土)午後一時から昨年と同じ「福岡市立・南市民センター」で開催されました。

冒頭、十四名の参加者全員で一分間の黙とうを行いました。今年に入り相次いで逝去された安藤由紀子さん、伊能陽子さん、佐久間達夫さん、並びに九州支部・熊谷要平さんのご冥福をお祈りするとともに、これまでのご指導に感謝しました。本当にありがとうございます。

次いで司会から星埜代表理事のメッセージの披露があり、引き続きで議事に、九州支部の年間活動報告等の支部長報告等を行いました。

恒例の講演は当初、四本の演目を予定していましたが、一番目に「松陰・竜馬の歩いた道」を講演する予定だった松尾卓次氏が身内に急な不幸が出たため欠席。河島悦子氏「山陽道測量における伊能測量隊」、馬場良平氏「佐野常民と伊能忠敬について」、遠藤薫氏「出版あれこれ」『筑前維新の道』の反響」の計三本の講演となりました。

講演をはさんで石川所有の国土地理院蔵『伊能中図—九州』(複写)の展覧を行いました。この図は美しい仕立てなのに対馬はあるが隠岐が描かれておらず、他の島も一部が描かれていない、という珍しいもの。あるいは藩領との関係か?一同その謎に思いをはせました。

例会終了後、懇親会が行われました。九州支部の長老・穂吉会長の乾杯で始まり、いつもながら賑やかで楽しい時間があったと言う間に過ぎ、中締めとなりました。今年も忠敬先生に感謝の一日でした。

(いしかわ せいいち・九州支部長)



意欲的に多彩な活動を展開しつつける九州支部の会員・多士済々の顔ぶれ

参加者(前列左から) 松尾紀成、平川定美、河島悦子
石川清一、穂吉正明、中富道利、宮地滋 (後列左から) 山下浩司、遠藤薫、馬場良平、井上辰男、植村幸男(西日本測
研社・オブザーバー出席)、国重正樹、野田茂生(敬称略)

■朝日新聞「惜別 伊能陽子さん」 朝日新聞社・清水弟さん

伊能忠敬研究会顧問

伊能 陽子さん

東京都世田谷区のアトリエで、伊能忠敬から7代目にあたる洋画家、伊能洋さん(75)は、妻・陽子さんの死がまだ信じられずにいる。「一番びっくりしたのは本人でしょうね」

「忠敬先生」は女たちが守ってきた。戦中戦後の混乱期に洋さんの祖母が千葉県香取市の家と遺品類を伝えた。母は、国の重要文化財となった遺品類を同市に寄贈、それを収める記念館ができた。その後も、おひなさまや着物を包んだ紙が地図の下図だったり、

くしゃくしゃの村絵図が納戸にあった。陽子さんが整理を始めた。表装が得意な知人に弟子入りし、古文書教室に通った。元国会図書館勤務の安藤由紀子さんと二人三脚で作業を進めた。

1995年春、伊能図を研究していた渡辺一郎さん(80)がパリ郊外で伊能中図(8枚組み)を発見した。それを新聞で読み、陽子さんが渡辺さんに電話した。「資料を見ていただけませんか？」。針穴



東京・深川の富岡八幡宮に初詣で。伊能忠敬の銅像の前で02年1月4日、伊能洋さん撮影

いのう・ようこ

1月25日死去(急性心不全) 75歳
1月28日葬儀

測量の大家の遺品守り

の残る下図や緯度1分の長さを歩測した測量図もあった。この出合いが研究を大きく進めた。フランス中図の里帰り展を機に伊能忠敬研究会が発足した。

明るく愛想がよくて名前と顔を覚えるのが特技の陽子さんは、研究会の「マドンナ」だった。99年から2年かけて全国を一周した日本ウオーキング協会、朝日新聞社など主催の「伊能ウォーク」にも二十数回参加。01年には深川の富岡八幡宮に忠敬の銅像が立ち、加藤剛さん主演の映画「伊能忠敬―子午線の夢」も公開された。

その後も遺品整理は続いた。史料918点を記念館に収め、06年6月に「世田谷伊能家伝存 伊能忠敬関係文書目録」を刊行。「20年かけた仕事が終わってホッとしたのかもしません」と洋さん。

研究会顧問だった安藤さんも今年1月4日、75歳で他界。名替代表の渡辺さんは「仲がよかったけれど、人生の退場まで一緒とは」と天をおおぐだ。(清水弟)

朝日新聞社の清水弟記者による伊能陽子さん追悼文が三月一二日付朝日新聞(東京本社版)夕刊に掲載されました。清水さんは伊能忠敬研究会発足の契機となった渡辺名誉代表によるペイレ図発見の時の朝日新聞パリ支局長。地

図調査に際して通訳を紹介するなどの労をとり、その後、伊能ウォークをはじめ数々の伊能イベントにも関わるなど研究会の活動を見守ってきた伊能陽子さんの人柄もよく知る人。追悼文は伊能陽子さんのこれまでの活動を紹介しながら、それがそのまま研究会の沿革史となつていきます。写真は富岡八幡宮の忠敬銅像の前で珍しく和服姿で撮影されたありし日の伊能陽子さん。この写真を見て、さまざまな場面での陽子さんを思い出し、悲しみを新たにされる会員も多いのではないのでしょうか。

ありがとうございました

伊能 洋

この度の伊能陽子の急逝に際しましては、皆様から本当にお心の籠ったご挨拶を頂きまことに有り難く御礼申しあげます。

新盆も近付いて参りましたが、いまだに私どもには実感がなく、長い旅行の留守を預かっている感じです。突然女手のなくなった家は何とも大変で、どれほど陽子に支えられて生きて来たか思い知らされておりますが、男三人毎日を何とか無事に過ごしていますので、どうかご心配下さいませんように。

それにしても安藤由紀子さん、陽子、佐久間達夫先生と創立メンバーが一挙に研究会から消えたのには驚きました。二〇年という年月をパートナーだった安藤さんの計報は、陽子にとっても大きなショックでした。二〇一〇年という年は、天候、政治、経済など全てに於いて一つの大きな変わり目という気がしますが、忠敬研究会がこの大きな試練を乗り越えて続いていけるよう、切に皆さま方のお力添えをお願い申し上げます。

三月二〇日の忠敬遺品、国宝指定の発表が陽子たちに間に合わなかったのが残念でしたが、二、三四五点という大量の指定となったことには、さぞ驚いていることでしょう。世田谷伊能家伝存目録からも多くが入り、四月末から東京国立博物館で開かれた「国宝指定記念展」では陽子が最初に裏打をした忠敬の「黒江町浅草測量図」が中央に並べられておりまして、まさに以って冥すべしではないかと思っております。なお六月二九日付の官報に国宝指定の決定が告知されました。



「伊能陽子（敬徳院梅香陽明大姉）墓」観福寺七左衛門家墓所
この墓石は陽子と二人で選んで平成16年に建てました。「縁」は私の字です。観福寺（真言宗）は伊能七家の菩提寺で、忠敬の三郎右衛門家は兄・敬まで17代が揃っています。私は15代景德（祖父）の実家・七左衛門を継いだので三郎右衛門家の奥隣に墓所があります。父母の墓からほんの数歩のところですよ。

陽子の七五年の生涯を顧みますと、それぞれの世代で充実した人生を送っており、ことにライフワークとなった千点に及ぶ忠敬関係の遺品の整理を終わらせたことは彼女にとつて最大の喜びだったと思います。本人はこれから少し遊ぼうと思っていた矢先のことで、欲を言えば切りがありませんが、実に多くの先輩、友人、知人に恵まれ可愛がつて頂けて倅せな人生だったと言えましょう。皆さまが惜しんで下さり、覚えていて下さる間は陽子は生きていると思います。

本当に長い間有難うございました。

■梅香る陽子様へ 札幌市在住 伊能二三代

一昨年の大晦日、朝刊を開くと「伊能大図全国巡回フロア展主催者の公募」の記事が掲載されていました。前々から伊能忠敬に興味があり、佐原出身者で伊能姓である母から生まれた私は、離婚後に母の旧姓の伊能姓となった事もあり、じつとはして居られませんでした。忠敬が志を変えた同じ五十歳になるうとしていた頃の出来事です。忠敬のために何か出来る事はないかと、札幌市に住む私はフロア展の場所探しから始めました。そのおかげで様々な人々との出会いが待っていました。その中で最大のものは伊能洋様・陽子様との出会いでした。忠敬のおかげで出会うことが出来た私の人生にとって運命的な出会いと言ってもあります。伊能様のご自宅を教えて頂き、対面の機会を作って下さいました。世田谷の御自宅に札幌から美術を専攻している娘とともに伺い、初めてお会いしたのは、去年の八月のことです。初対面の私達母娘に大変良くして下さいました。夫婦でした。真剣にお話を聞いて頂き、お食事までお誘いくださいました。帰りの電車のチケットまで陽子様にいただき、何度も帰路を間違えないように教えて頂きました。洋様より伊能研究会へ入会を勧められ、例会でもご紹介してくださいました。何から何まで見ず知らずの私達母娘に優しく、人生のことまでいろいろと教えて下さいました。洋様の銀座での個展もご招待いただき、ちょうど同時に東京国際フォーラムで行われた「日本認知症ケア学会」に専門士として出席することになっていたので、運良く行くことが出来ました。陽子様がキャリーを持った私たち母娘に手招きし、「こちらに荷物を置いて観なさい」と、まるで母のように迎えて下さ

いました。内心、私は東京の母だと心におさめていました。そう思わせる陽子様の、まるで太陽のような明るさと、苦勞を苦勞に見せない芯の強さはどこから来るのだろうか、私にとって「師」でもあり、一人の女性としてあこがれました。国宝となった伊能図を命をかけて守り続けた、平成の忠敬だと私は思っております。

紫のリンドウが仏壇の写真立ての横に供花として飾られています。リンドウの花言

葉は「強い正義感、的確、誠実、悲しんでいるあなたを愛する」とあります。その花が似合う写真立ての中の微笑みでらっしゃる陽子様に手を合わせ、私の東京の母であり師でもある陽子様に、この世からお手紙を送らせていただきます。

「陽子様、天国で忠敬様に会うことができましたか？」

陽子様の笑顔が未だに忘れられず、梅香る札幌の地で、もの思う私です。



忠敬談話室

③

■戦時中の二冊の忠敬本の紹介 逗子市在住 秋間 実

去年の暮れ、別べつの二軒の古本屋さんからほとんど同時に、前大戦中に忠敬先生について書かれた別べつの本が一冊ずつ送られてきました。どちらも、それぞれのカタログで見つけて注文しておいたものです。

一つは、日本放送出版協会の「ラジオ新書」というシリーズのなかの藤田元春著『伊能忠敬の測量日記』（一九四一年刊、小型B6判、一三三ページ）です。

もう一つは、新潮社の「新傳記叢書」のなかの伊藤弥太郎著『伊能忠敬』（一九四三年刊、B6判、二八八ページ）です。

さて、後者の「序」の最終パラグラフを読むと、両書の関係と、当時のいわば文献事情の一端とが、わかります——

現在までに世に出た忠敬の傳記のうちで一番詳細なものは大谷亮吉氏の著『伊能忠敬』であるが、これは大正六年（一九一七年）の出版で、今は絶版である。この書を簡略にして、二三補足を加へたものが昭和十二年（一九三七年）に伊達牛助氏によって著されてゐる。書名はやはり『伊能忠敬』で、この書も近來見ることは稀である。藤田元春氏の『伊能忠敬の測量日記』が今日では入手し得る唯一のものであらう。これはまた同氏の『改訂増補日本地理学史』にも収載されている。しかしこの書は直に伊能忠敬の傳記とはいはれない。それ故、幸にこの小著がその闕漏を補ふならば、即ち著者の喜びとするところである。

一九四三年という戦争末期の時点では、事実上、この二冊しか忠敬本はなく、この二冊ともたまたまほぼ七〇年後にほぼ同時に老生の手にはいった、ということですね。

さきごろ三月の末までに、暗い気持ちをかかえながらですが、両書を読みおえました。無駄ではありませんでした。二冊とも、名高いばかりでその生涯と事跡とについては具体的にはほとんどなにも知られていない、この偉人の真の姿を、史料にもとづいてできるだけ具体的に伝えよう、という著者の熱意がひしひしと伝わってくる良書で、いわゆる皇国史観などとは縁もゆかりもなく、へ戦時中もこういうまともな学問的な本が出版されていたんだ、とあらためて再確認させてくれて、読みごたえがあり読みがいがありました。それぞれの特色・印象に残った点などは、残念ながら、ご紹介できません。老生としては、これからも愛蔵して、ときどき読みかえしてみるつもりです。もしどなたかへのぞいてみよう、と望むかたがおられるようでしたら、よろこんでお貸しします。

* * *

ところで、会報五九号（二月号）の「編集後記」に挙げられている佐久間達夫氏の『新説 伊能忠敬』の版元は、どこでしょうか？ いずれこの本も、著者の生前の温容を偲びながら、読んでみたい、と思っています。

（二〇一〇年 五月八日）

■星埜由尚『伊能忠敬—日本をはじめて測った愚直の人—』

の刊行をよろこぶ 逗子市在住 秋間 実

老生は、ご縁があつて伊能忠敬研究会の末席につらなつてはいます
が、もともとはヨーロッパとくにドイツとオーストリアとで近現代に
展開された哲学や自然科学思想などをマルクス主義の立場から研究し
てきた者で、忠敬さん大好き人間ではあるものの、先生の生涯や事跡
や未公開資料などをじかに調査研究する資質も能力もいとまもなく、
先人たちや会員諸兄弟の貴重な研究（会報掲載分を含めて）を少しず
つあと追いつかせていただいているにすぎません。

そのような頼りない非力の老会員にとつてこのほど四月二〇日に山
川出版社から刊行された星埜代表の最近著『伊能忠敬』は、まことに
大きなうれしい贈り物です。

「リブレット」という大きくはない本（B5判、本文八八ページ）
のなかに、頭注をも活用して、忠敬先生について真に知る価値がある
事柄、いわば最重要事項が、簡潔に的確また適切に盛られている、と



日本史リブレット人 057
『伊能忠敬—日本を初め
て測った愚直の人—』
星埜由尚著
山川出版社 2010.4.20 刊
定価本体 800 円（税別）
ISBN978-4-634-54857-2

いう印象を受けます。そのなかには、たとえば、徳川封建社会のどの
ような諸条件のもとで先生の学術研究・測量が続けられたのかが説得
的に明らかにされている（↓小島説の批判）、ということもあります。

そして、先生の偉業の歴史的意義（これまでに果たしてきた役割）・
今日的意義（将来に向かつての活かしかた）についてわかりやすく説
明されています。さらには、公共のために、という先生の意識、その
愚直な生きかた、これがたたえられていて、老生は、深く強く同感す
る者です。加えて、装幀がすっきりと明るく美しく、精選されて散り
ばめられた絵・フォトも適切、年譜・参考文献表も周到綿密、ときて
います。——要するに、初心者・一般読者にとつては非常にた
る楽しい手引き書ですし、ベテラン・専門研究者からは高い評価が得
られるでしょう。

当研究会を率いる代表理事がこういうみごとな本を書いて上梓して
くださったという事実は、全会員にとつてのよるこび・誇り・励まし
です。とりわけ、年頭からたてつづけに三巨星（安藤由紀子さん・伊
能陽子さん・佐久間達夫さん）が逝去されるといふ思いもかけない悲
報に接して、茫然とし、いまでも暗然とした心境にある者にとつては、
暗闇にさし込んだ一条の明るい光とも感じられるのです。星埜代表、
ありがとうございます。

（二〇一〇年 五月五日）



お便りから

■石嶋博行さん（銚子市）

忙しくており、佐原にもなかなか行けずに残念です。

■石橋輝樹さん（新潟市）

ますますのご発展を祈念いたしております。

新しい歌、大変興味があります。残念ですが欠席させていただきます。

■井上靖子さん（所沢市）

早速乍ら過日伊能陽子（妹）急逝の折、研究会を通してのことにと思いますが、お通夜に四〇〇人もの方にお集まり頂き、遺族といたしましては感無量でありました。安藤さんと共作の目録を仕上げたばかりに二人共逝つて了いました。改めて生前の御厚誼を感謝いたします。

■今崎仙也さん（呉市）

全国で2枚しかないと言われている伊能忠敬測量之絵図『御手洗測量之絵図・浦島測量之絵図』を蔵に展示し、看板「伊能忠敬測量絵図館」を自作でかかげました。

■植田浩一さん（大田区）

読む・書くが商売だったが、今や歩くスピード常人の一〇分の一。老齢のため（86歳）体反応せず。残念ながら欠席。敬愛する大谷亮吉の写真・初めて見ました。感激です。

■梅田和雄さん（神戸市）

いつも欠席にて誠に申し訳ありません。皆様に宜しくお伝えください。

■河西浩さん（甲府市）

先日、静岡大に通っている息子が教育実習で伊能忠敬を取り上げたそうです。人となり、『大日本沿海輿地全図』のすばらしさ、その地図作りの愚直な態度と歩測体験をしたそうです。私が入会した頃、彼は小一か小二でした。ずい分時が経たぬものです。（要旨）

■神戸利行さん（加東市）

伊能忠敬関連の本・地図・品物を集めるのに夢中になっています。集められる収集品が少なくなり、手に入りにくくなっています。また高額な分は手がでない。今、手詰まり状態です。

■斎藤仁さん（東村山市）

「寅年地名」掲載ありがとうございました。悲しい御三方の鬼籍の特集に相応しくない一頁となりゴメンなさい。知らせを受けた時、頭の中は真白・・・なぜ？涙が・・・本当に悲しい思いです。今何もできませんが、発送のお手伝いだけは（実は五月末にまた入院します）。

■谷垣忠利さん（豊岡市）

昨年五月より脑梗塞で倒れまして以来、意思疎通不能の寝たまま状態となっておりますが、二〇一〇年度をもちまして退会させていただきます。よろしくお願ひ申し上げます。いろいろとお世話になりました。ありがとうございます。

■中尾弘さん（草津市）

この日はあいにく鳥取への法事予定で申し訳ありません。新しい歌の発表ありで、とても残念に思います。いつか又。盛大になる事、お祈り申し上げます。

■平野幸彦さん（札幌市）

なかなか富岡八幡宮まで行けません、皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

■藤岡健夫さん（横浜市）

忠敬の遺品一式が国宝に答申されたこと、大変意義あることです。安藤・伊能・佐久間さんのご他界は大変残念です。ご冥福を祈ります。

■村上昭三さん（船橋市）

体調が余りよくなく、気分的には弱っていますが、宜しくお願ひします。不

■増田健之助さん（匠瑳市）

私は元気で多忙な毎日を送っております。ご無沙汰しておりますが、これからもよろしくお願ひ申し上げます。

■松尾紀成さん（嬉野市）

今年は重鎮をなくしてショックですが、元氣な研究会でありますように、総会の盛会を祈ります。

■山浦佐智代さん（三条市）

八月一五日から一七日まで「全国巡回フロア展 in 新潟」開催予定です。

■吉田正人さん（千葉県長生郡）

四月より筑波大学人間総合科学研究科世界遺産専攻に異動しました。

■渡辺一郎・貞子さん（渋谷区）

伊能忠敬関係資料の国宝決定!!アメリカ大図以来の快挙です。

お知らせ

例会報告 (第七回)

■第七回例会(四月例会) 四月十八日(日)

○講演一「伊能図とともに深化する私の雑学」

講師・大沼 晃さん(講演内容は四九頁)

○講演二「地図屋の伊能測量学」

講師・猪原 紘太さん(講演内容は五三頁)



本年第2回目となる4月例会には14名の参加がありました。講演に先立ち、伊能陽子さん、佐久間達夫さんのご逝去を悼んで全員で黙祷をささげました。

次回例会のご案内

■伊能研究会十五周年記念佐原例会・懇親会
○日時 二月十二日(土) 詳細は後日通知

フランス中図の佐原招聘につづく伊能忠敬研究会の創立十五周年を記念し、佐原支部のご協力のもと、標記の記念行事を計画中です。

期日は確定しています。会員各位におかれてはスケジュールへのチェックをお願いします。



会員情報 (敬称略)

入会

伊藤信男 伊能恵理 狼芳明 大西道一
高安克己 竹村基 堀野正勝 谷田部勝男

退会

石川進 加藤巷児 小林正夫 田中
邦博 並木マリ子 山浦佐智代



日々の話題

■新聞記事(国宝指定関係)『朝日』『読売』『毎日』『日経』『東京』他各紙(三月二〇日付)

■天皇・皇后両陛下「新指定国宝・重要文化財」ご覧(東京国立博物館)五月三日(宮内庁発表)

■『朝日新聞』(東京版)七月十七日「忠敬の歩み賛歌に―富岡八幡宮でお披露目―」発表会

■新聞記事(フロア展関係)『東京新聞』(小金井展)『山陰中央新報』(松江展) 他各紙

■『朝日新聞』「終わりと始まり」に「伊能忠敬地図の原理と地上の脅威」池澤夏樹(六月一日)

■新聞記事「山陰中央新報」復元された伊能図」渡辺一郎(六月二日・九日連載)

■TV出演「体を張ってニッポンを知らう!! 忠敬が測り忘れた島の地図を完成させよう」(フジテレビ) 十月九日放送に星埜代表理事が出演。

■展覧会「伊能忠敬と地域の測量家たち」射水市新湊博物館で四月二三日・六月二〇日開催

伊能忠敬記念館

☎0478・54・1118

◇伊能忠敬関係史料・国宝への歩み・展

期間(開催中)〜来春4月3日(日)

展示品 国宝に指定された地図・観測機器

などの伊能忠敬関係史料

休館日 月曜日・年末年始・祝日の翌日

(電話等でお確かめの上お出かけください)



お知らせ

■国立天文台(三鷹) ☎0422・36・3951

「渋川春海と『天地明察』」平成23年3月31日

■復元伊能大図巡回フロア展(詳細は八頁参照)

◇香取市 3月25日〜27日「佐原体育館」

◇郡山市 4月28日〜5月1日「ビッグパレット」

◇帯広市 6月16日〜19日「十勝オーバル」



譲ります

■『最終上呈版 伊能図集成(大図)』『小図』

柏書房 鈴木純子・渡辺一郎解説(幕府に上呈

した大図写本四三枚と小図写本三枚を原本に忠実にカラー複製した資料集成)数年前に八万円で購入したものを四万円です。植田浩一(会員)

【連絡先】☎03・3734・7420

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務局が新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F

伊能忠敬研究会

電話・FAX

03-3466-9752

事務局メール

junko-s@jcom.home.ne.jp

（07年8月よりアドレスが変わりました）

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は原則として8頁迄です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。CD（推奨）、メール添付、手書き可。FD要相談。一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。話題、情報、近況などのお便りもお待ちしております。

伊能忠敬研究会関係のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadaka.org/>（休止中）

「InoPedia（イノペディア）」…伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>

（担当・渡辺名誉代表）

「伊能忠敬研究会・資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ

伊能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田理事）

<http://www.ttrm.or.jp/koko>

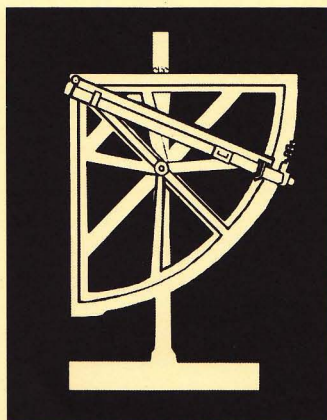
編集後記

◇四月に友人を誘って三井記念美術館特別展「徳川家康の遺愛品展」を見に行った。チラシに家康所用の日本地図とコンパスが描かれていたので、家康も地図好きだったのかと興味を持ったからである。◇展示された遺愛の品々は、家康が理科系の人であることを示していた。「老獪なタヌキおやじ」というイメージで語られるが、実は根っからの合理主義の人だったようだ。◇思いがけなくも、この展覧会がその友人との最後の外出となってしまった。今年は年頭から研究会の諸先輩を見送ることになり寂しく悲しい思いをしていたが、最も親しい友人までが急逝して何ともいいようのない日々となってしまった。◇そこに今夏の猛暑。体調を崩し、会報の発行が遅れて多大なご迷惑をおかけすることになってしまった。ご寄稿下さった方々をはじめ、会員の皆様に深くお詫び申し上げたい。◇今号で編集担当を交替させていただく。この三年間の皆様のご協力に深く感謝する次第である。（M）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.60 2010



TOPICS I

Historic Spots about Inoh Tadataka (10)	Onuma Akira	1
The Inoh Family's Buddhist Altar	Editorial Department	2
Inoh-related Documents Became the National Treasures	Suzuki Junko	4
General Meeting Report in Fiscal Year 2010	Secretariat	6
Song of Inoh Tadataka	Secretariat	8
Exhibitions of "The Large-Scale Inoh Maps" are During Progress	Watanabe Ichiro	9

TOPICS II

Place Names and Landscapes in " <i>Inoh Daizu Soran</i> " (14)	Hoshino Yoshihisa	11
A Trip to Seek "Yebisu-ya"	Onuma Akira	21

ARTICLES

Study of Inoh Tadataka (10)	Ishiya Haruka	25
Takeaki's Days in Russia	Itoh Eiko	38
Fine Book " <i>Inoh Tadataka</i> "(4)	Maeda Koko	43

INOH-JUKU

My Miscellaneous Knowledge about Inoh Maps	Onuma Akira	49
A Cartographer's Study about Inoh Maps	Inohara Kohta	53

BRANCH REPORT

Report of Kyushu Branch	Ishikawa Seiichi	57
-------------------------	------------------	----

MEETING ROOM

Letters from Members Daily Topics and Informations	Editorial Department	60
---	----------------------	----

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY